家庭雜誌

第四拾號

戰時に於ける家庭　今の内は上も下も如何にわびしく賤しの業なりともつとめて、世を渡るこそ肝要なれ。

塵埃奇談　器械仕かけの掃除人。

秋の樂　七草の色の樣々。

家庭の敎育　世これより大切なることはあらず。

通俗負傷者看護法　其如何に切要に如何に解り易きかを見よ。

國民新聞

國民新聞は**百尺竿頭一歩を轉ぜり**

國民新聞が、如何に卓厲風發、以て支那征伐に對して其の平生蓄積したる潜勢力を發揮し仙して臨時議會に大手腕を振ひたるかは、國民新聞自から之を證して餘りあり。今や時機層々相迫る、如何に國民新聞が、其の大勢に乘じて、江湖愛讀の君子に酬ゆるかは、今後の紙上に徵して之を知れ。

(第一)國民新聞は**電報**新聞也 郵便通信の迂路を捨てゝ、**急電迅報**の**直截**手段を取る刻一刻、機一機、活劇、活勢、歷々として紙上に躍れり、

(第二)**第一二軍**の**從軍**、及び**海軍通信員特派**國民新聞は此**第二軍從軍**として**阿部充家久保田金僊**を派し**海軍通信者**として**國木田哲夫**を**特派**せり其靈手敏腕に成る**飛信急報**は奕々として紙上に輝く可し。

目下各地に特派したる通信員は左の如し。

第二軍	久保田金僊
	阿部充家
第一軍	松原岩五郎
海軍從軍	國木田哲夫
仁川	愛民生
京城	菊地謙讓
	天涯生
釜山	鑑湖生
大本營地	德富猪一郎
	平田久
	深井英五
	横澤三次郎
	芳野駒彦

事宜によらば、更らに幾多の特派員を出張せしむることある可し。其の仔細は國民新聞紙面に追々發表す可し

●一ヶ月三十五錢三ヶ月壹圓一ヶ年三圓九十錢地方一ヶ月に付郵税拾三錢●廣告料(一行二十二字詰)一回拾三錢二回以上拾二錢

發行所 國民新聞社
東京市京橋區日吉町四番地

民友社編纂日清韓三國實用明細地圖添
國民新聞戰地特派畫伯米僊及米齋挿畫

再版出來

日清軍記

定價拾五錢
郵稅四錢

端と東學黨の亂に起し平壤の大勝に終る日支衝突の事情、京城の小戰、南洋灣の海戰、成歡の凱旋、平壤の大勝、海洋島海戰、朝鮮の風物人情に至るまで歷々掌上に見るが如し、其文は平易流暢にして恰も太平記を讀むが如し特に久保田米僊及米齋兩氏が獨特天縱の彩筆を以て親しく其警眼に映ずる所を描き繪畫數十を挿みたれば、此種の著述多しと雖も其正確にして趣味あるは此著の右に出るもの稀ならん。

◎日韓清三國實用明細地圖

虛修を勉めず、實用を旨とす、用意周到、電信線あり、鐵道線あり、海陸里程表あり。世上滔々たる中に於て超群絶倫と爲す。右は購讀者諸君の便宜を料りて、特別廉價にて發賣す、

一枚壹錢五厘郵稅一枚以上七枚まで一錢。以上七枚を增す每に二錢を追加す。

されば可成多數申合せ注文相成り候方便利なる可し。尤も注文は一切前金を要す

發賣所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

十二文豪 第十七卷

塚越芳太郎著

近松門左衛門

近刊

定價十八錢　郵税四錢

征清の六軍海を渡て大陸に入り、大勢潮の如く、國民の意氣方に昂れり。大なる日本は將に世界の極東に打建てられんとす。此の千歲の一時に際して、「近松門左衛門」出づ。其意外なるを驚くこと勿れ、其時を知らざるを笑ふこと勿れ。槊を横へて猶詩を賦し、軍中猶書を講ずるにあらずや。堂々たる大國民の胸中焉ぞ其間に千古の詩人を承許するの閑日月なからん。

日本の元祿あるは猶は英國のエリサベス時代あるが如きなり。元祿の近松門左衛門あるはエリサベス時代のシエーキスピアあるが如きなり。

其高下の同じきや否やは我知らず、其小大の等しきや否やは我知らず。然れども英國民にしてシェーキスピアを有するを誇るの權利あらば、我亦近松を有するを誇る能はざらんや。

日本開國而降二千年、能く人生を諷詠したること復た彼が如くなりしものある乎。

將に來らんとする日本は如何に誇るべき詩人を有するやを知らず、去れども已に去りたる日本は思想史上の大立物として此の千古の詩人を推さゞるを得ざるなり。嗚呼彼、近世榮華の絕頂に立ちて、歡樂窮りて哀情多き人生を永嘆す、其永嘆や直に日本思想の花たり。此書は則ち此の誇るべき詩人の生を叙したるもの、殊に意を用ゐて思想界の生涯を叙したり。然れども其叙し得て眞相に近きや近からざるやは讀者自ら之を判して可也。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

高木信威纂譯

ピット

肖像入
定價二十錢
郵稅四錢

各新聞の批評

●ピット氏は二十二歳にして代議士となり二十三歳財務大臣となり廿四歳にして總理大臣となりし英國著名の政治家なるとは世人の既に知る處本書は現時英國の總理大臣にして優秀の名高きローズベリー伯の原著に基き流暢の筆華麗の文を以て譯したるもの篇を分ちてピット何人ぞ、其少時、シュルボルン及聯立內閣少年宰相、ピット內閣の初年、ウォーレンヘスチングズと攝政職、外政、佛國革命の影、戰爭大臣たるピット、內治、愛爾蘭、政府顚覆、最後ピットの人物及地位、の十四段となし此俊傑の性行事迹を明快に詳說す之を著者の前著たるゲーテに比すれば敘事の細密結構の雄壯同日の論に非ず盍し詩人と政事家と其天分事業を異にするに由るとは雖も抑も亦著者が奮勵一番せしに非ざれば焉ぞ能く此の如くなるを得ん曩に民友社出版の人物傳中に在ては德富健二郎氏のグラッドストンと相幷て相下らざる好書なるべし聞が如くんば著者は齡纔に二十二と而て著はす所皆秀逸勉めて已まずんば造詣測り知るべからざるものあらむ（京橋區日吉町民友社發行定價二十錢）（日々）

●高木信威氏の纂譯にて英國政治家ピットの一代を敘したるもの文章は例の德富派ゆゑ雄渾として誦すべく敘事評論最も清逸、啻だピットの心胸面目を知るに足るのみならず側面より英國四十年間の奇變多かりし歷史を察すべし（中央）

●サッカレーの所謂曠前絕後の萬能男子ウ井リヤム、ピットの生涯を知らんと欲せば先づ本書を讀んで可なり是れ現英國の主相ローズベリー氏自ら其腦漿の幾分を割ちたるピット論を基本として編みたるもの未だ必ずしも間然する所なしとは言はず何となれば疑きに土岐某氏の譯述にかゝる經國龜鑑といふものあればなり（二六）

●二十四歳の總理大臣ピットは、議院政治家の摸範也、典型也、今の所謂政治家を以て任ずる者、幸ひに讀んで鑑みる所あれ

●代議制の世界に創立せられて以來未曾有の長命內閣はピットの內閣なり而も其長命を持續したるは無理遣りの手段に出でたるにあらざるは大に範とすべきなり伊藤內閣の治下に立つ國民は參考の爲め一讀すべし（讀賣）

●ピットの詳傳なり、翻譯なりと雖も譯者の偏見に出づる議論も多し、是れ亦銷夏の好侶伴と云ふべし、（經濟雜誌）

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税
一冊	金五錢	金五厘
半年(十二冊)前金	五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)同	金一圓	地方共金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 有馬俊彦
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十七年十月廿五日發行

家庭雜誌第四拾號

目錄



家庭雜誌第四拾號

（明治廿七年十月廿五日發兌）

社説

戰時に於ける家庭
（勤と儉と）

昔德川家康未だ微にして三州岡崎在城の時、一日途に家人近藤某が泥を以て顏を汚し農民中に交り田植しつゝありたるを見、之を呼びければ、某は餘義なく顏を洗ひ田の畔に掛け置きし刀をさして、破れたる澁帷子に細十襷のまゝ出でければ、家康云ふやう、『我れ今所領乏しく汝等を思ふまゝにはごくむ事を得ず。汝等いさゝかの給分にて武備の嗜もならざれば斯く耕作せしむるに至る。去りとは不便の事なれ。何事も時に從ふ習なれば、今の内は上も下も如何にわびしく賤しの業なりともつとめて世を渡ることそ肝要なれ。憂苦に生れて安樂に死すと云ふ古語もあれば、末永く此の心持を失ふな。いさゝか耻るに及ばず』とて落涙に及ばれたりと。

是れ何人もよく記臆する所の佳話なり。如何にも憐に聞ゆれども其反面には立身興家の氣象欝勃として顯はれ末頼もしき面影あるにあらずや。放縱豪肆を以て英雄の本色なるかの如くに誤り心得たる蒲生飛驒守氏鄕は、家康の如きしはきものにては迚も天下を取ること叶ふまじきよしいひたれども、彼の優に天下を取りて子孫三百年の業を垂れたるものは、却て此のしはしといはれたる儉と勤とに由らずんばあらざりき。

今や我が征淸の軍は遠く出でゝ、櫛風沐雨高麗唐の虎伏す野邊に在り。畏くも天皇陛下は親征して蹕を廣島に駐めさせたまひ、一天萬乘の御身を以て、二十疊内

外の一室に御起居あり、唯此の一室を謁見室とも便殿とも食堂とも學問所とも又夜に至れば寢臺を持込みて御寢間とも遊ばせられ、其傍は直ちに御湯殿とこそ承はれ。

况や臣下の面々をや、國民新聞蘇峯氏の十一日廣島飛信中、

> 吉川の狹縮舍營には、川上參謀次長を始として、七八十の將校以下の人員あり。塚本町の衆議院書記官の寄宿には六疊敷に三人の書記官合宿せり。薄暮街頭を步すれば帽光劍影肩摩踵接殆んど步に堪へず。第一師團の兵現に當地に在り。兵氣整肅、夫卒役夫に至るまで戒飾嚴厲毫も譁す所なし。
>
> 過日某氏を過ぐ。窓外索々の聲を聞く、歸途之を見れば一個の兵士砥石に刀劔を磨しつゝある也。

とあるは其實况なるべし。言動愈遲に氣愈奮ひ、擧國鬪然戰ひ勝て將卒驕らず。として興國の意氣盈つ。試に窓外劍を磨して餘念なき彼等步卒の意を取て解剖し來らば、何人か其赤心を泣かざらんや。

此等は是れ實に國民の影子なり。茅屋の下、竹籬の中、如何に單純潔清にして如何に熾熱なる敵愾心が彼等を俠武耻あるの人に驅ることの如何に大なるかを見よ。此後楯ありて始めて此將卒あるべきなり。

時情已に此の如し、國民皆戰ふとはこれの謂ひなるべし。軍隊は敵に向て戰ひ、農夫は野に戰ひ、商賈は市に戰ひ、行旅は途に戰ひ、婦人は家に戰ふ。劍を揮ひ銃を放つのみ戰ふにあらず、鋤を揮ふも亦戰ふなり。牙籌を手にするも亦戰ふなり。行途を走るも亦戰ふなり。以て軍隊をして顧る所なくして進ましむるなり。殊に婦人が家を治め子女を育し節儉力行以て國家の核子たる家庭を鞏むるに至ては其默々の戰勳決して軍士の下にあらず。

國民の覺悟實に右の通りにして、婦人女子の覺悟も亦右の通なりとせば、今更何の言ふ所あるにも及ばざる事なるが、猶念にも念を入て一言し置かざるべからざるは此際に於ける家庭に於ける儉と勤との事是なり。』

勿論一家の事を幹して餘力あるの婦人は去て傷者看護の任に當るも可なり、遙に征衣を寄せて旅情を慰むるも可なりと雖、一般の婦人は奢侈冗費と戰ひ怠惰安逸と戰ひ、以て社會の地盤たる家庭を安全堅固にするより急務なるはあらざるなり。平時に於ても固より然る事なるが、戰時に於ては殊に然らざるを得ず。是れ興國の基礎なればなり。家康が所謂『今の内は上も下も如何にわびしく賤しの業なりともつとめて世を渡るこそ肝要なれ』とは此時に謂ふに非ずや。

以て奢泰ならしむべく以て儉勤ならしむべき本は、洵に家庭にあり、家庭を主幹すべき婦人にありとせば、吾人がこゝに殊に論じて家庭の儉と勤とを奬勵するも故なきにあらざるなり。

科學

塵埃奇談（四）

器械仕かけの掃除人

引き續づきて說き來たりし塵埃奇談は、たしかに讀者の心中に、一の疑問を起こしたるべし。そはかくして作くられし塵埃は、誰れが掃除を爲すやとの疑問は、其談を讀みつゝある中に、正に起るべき問題なればなり。その問ひを解譯するに先ちて、今一種の塵のあるとを說かざるべからず。

彼の有名なる學者、ノーデンスショール博士、或る時北極海を航海中、とある海中にて、無數の群魚、一つも殘らず死せるを見たり。魚の死樣を見るに彼等は、狹まき氷の間に集まり來り、混亂の上死せしは歷々と

して明かなり。

水中に常に住まへる魚類にして、何故にかく一時に死せるや疑ふ人もあらん、こは容易く說明爲し得べし。人は空氣の中に常に住ふと雖ども、室を閉ち込めをく時は、この魚と同じ最後を遂ぐべし。魚も人と同じく水中に溶解せられたる、酸素を呼吸しつゝ、生育するものなれば、酸素欠乏すれば死する也。されど何故に一度呼吸せしその空氣を、再たび呼吸して、間に合わせ得ざるやと云ふ人もあらん。こは手近なる試驗の報告によりて、明かにその理を說明し能ふべし。學者ヒユーペー氏、嘗つて一群の蜂の巢を見付けしかば、靜かに近か寄りて、その巢の入り口を嚴びしく閉ち、彼等が如何に爲すやを試みしに、憐れむべき生擒者は、半時間を經るや、經ざるに、身体の運動かなわずなり、各々仕事を止めて、僅づかに羽翼を振わするのみ。さて三十七分に至れば、各々巢の中に倒をれて、呼吸もかすかに成り行き、今暫ばらく續づくる時は、もはや窒息して、一も助すかるまじと見受けたり。されど巢の口のつめ者を、取るや否や、今迄倒をれたりし蜂共は、長の眠のさめし如く、我れも〳〵と動き始じめ、又た原の如とくに働きけり。これ正さしく空氣の不足せしを證するに足るべし。空氣が一度動物の肺に入るや、躰中の血液に含くまれたる炭素は、空氣の中にある酸素と化合して、炭酸瓦斯を作くる。ランプを燈して作くるものも、蠟燭によりて出來しものも、蜂の呼吸して作くりしものも、之れと同じものにして、一度吐きし空氣の中には、幾分かの酸素なきにあらざれども、その分量餘りに僅少なるが故に、動物を生かすの力なきなり。

さて此の動物に甚だ害ある炭酸瓦斯は、空氣より重もきと、一倍半にして、管を通じて、一所より他所に運ぶとさへ出來得ざる位なるが故に、定めし地球の低く

き所には、此瓦斯多く溜まりて、人や動物の口に入り易からんと掛念すれども、實際は反對の結果を顯わせり。そは常に高く飛揚して、他の瓦斯と混和するを常とす。

人は一時間半にして、一尺一分立方の空氣を呼吸し、一時間には四ガルロンと三分の一の空氣を呼吸す（一ガルロンは我二升五合餘に當る）故にもし一丈四方の一室を、嚴しく閉ぢ込めて、空氣の入り易からざる樣になし、そこに數時の間坐す時は、呼吸は漸々に苦るしく、頭は漸やく痛たみ、眠むけさし來るべし。もしこの躰にて、今十割の長き間だ忍耐せば、人は、その吸呼の根を、全く絶つに至るべし。

幸ひに我等の家は、障子の間より、窓戸の隙より、常に内外の空氣流通して、空氣の腐敗を止どむると雖ども、不注意よりして、狭まき一室に、數人群集し、しかも戸を開かざる時は、必ず明朝に至たりて、怪しき客人が、槌を以て腦裏を打ちつゝあるが如き、感じを起すべし。これ瓦斯の然らしむる處なり。

市中に住まへる人々は、已に慣れ來りたるが故に、何の苦痛もなけれども、山里遠く人家稀れなる廣野にありて、清潔極まりたる空氣に肺を養ひつゝ習れしものが、不意に人家稠密の市街に來るとあらば、鼻口を、綿もしくは、ハンカチフにておさゆるにあらざれば、一種不快の空氣鼻を撲ちて殆ど堪ゆべからざるの感あり。

マンチエスターの如き繁華の土地より、上る瓦斯は驚くべきものあり。一戸〳〵の竈より上る烟、製造所の烟突より吹き出づる炭酸瓦斯を計算するに、一日にて一萬五千〇六十六トンの大量と成る。（一トンは我二百七十二貫三百八十四匁餘に當る）其他にも地球の表面よりは、常に地中の熱の作れる瓦斯を吹きつゝあり。尚ほ細まかく分解せば、地球の南部よりは、北部の方

は、人々稠密なるが故に、炭酸瓦斯多く、西部よりは東部の方多く、新半球よりは舊半球の方遙かに多量の瓦斯あり。かくも多量に作くられつゝある瓦斯、即ち腐敗せる塵は、如何にして掃除せらるゝやと云ふに、その法方種々ある中に、一の都合よき事あり。そは氣躰は混和力非常に强よく、速なるか故に、水と油を、共に入れて上下に分かるゝ如くならで、氣躰は直ちに混和すべし。もし氣躰をして混和力を少くなからしむる時は、東京の如き、大坂の如き、昨今の廣島の如き、多人數の集まりし所の空氣は、一日にして腐敗し、住民は死せずとも、少なくも病氣を發すべし。今氣躰が如何に速かに混和するかを試驗せんとならば、空氣より一倍と五百二十九の重もさあり、水素より四十四倍の重もみありと計かられたる、炭酸瓦斯を、瓶の最も下層に入れ、その上より、酸素を入れ、次ぎに空氣より十四倍二分の一輕しと稱せらるゝ、水素を入れて、少しも動かさず。靜かに安置する時は、暫時にして全氣全く相ひ混和して、少しの別なきに至るべし。

茲に奇態なるは、時々刻々に增加しつゝある有害の炭酸瓦斯を、喜んで食する掃除人あり。之は植物なり。而してその飲み込むに速かなるとは、一時に多數の口を以て、多量の瓦斯を飲下するが故に、何程の瓦斯を製造したりとて、直ちに之を盡し、中々製造の間に合ざる程なり。

其一例として山毛欅の木を見よ。四段步の山毛欅の林が、一年に飲む處の瓦斯の分量は、實に八百八十二貫三百四十四匁なり。それのみならず外に又た、固き炭素を食すると、二百七十二貫三百八十四匁餘なり。さればもし、全世界を覆ふに、山毛欅の林を以てする時は、僅かに八年を出でずして、凡べての瓦斯は飲み盡されて、更わりの造くらるゝ暇なかるべし。之に反して、もし現今の世界が、一變して、水の分量更らに增

し、世界の四分の三よりも多く水とならば植物の分量が今日よりも減ずとすれば、今日の瓦斯は少なくとも百年は長續きして、容易に盡きざるべし。

植物が炭酸瓦斯を飲むには、根の力を要せず、幾百となく並べる葉が、乃ちその口となりて、各々嚥下するの働を爲せり。試みに或る植物を水計りの中に植へて見よ。然して土に植へしものと比べて見よ。何の交わりたる處もなく、生長し、同じ分量の炭酸瓦斯を含めるを試驗によりて知り得るは、植物が根の力によらずして葉より之を飲みつゝ育だてる證ならずや。故にもし、我等が天女の眼鏡を借るを得て、植物の生育する有樣を見んには、幾許とも知れざる瓦斯の潮流は、庭前の木々の葉の裏、牧塲の草の葉、森林原野、至る處の植物の葉に走り、向つて蜘蛛の糸を引ける如く、流れつゝあるを見るべし。而して木の葉が瓦斯を飲むと同時に、大陽の光線は、速かなる震動を以て、瓦斯の分子の上に、化學的作用を行こなひ、直ちに炭素と酸素とを分解して、炭素は同時に之を飲み盡くし、酸素は之を吐き出だしつゝあり、實に繁雜にして且つ規則正だしき器械仕掛のある製造業を細かに見るの慰みを得べし、或る人大切なる一種の植木を持ちしが、其形の好きが上にも、好くなさんと欲し、或は枝を切り、或は葉を欠きて、朝夕手入を爲せしに、愛する植木は遂に枯れ去りたり。こは木の生理を知らざりしがゆゑに、愛せんとして、反て大切なる口を多く取り去り、榮養を得るの道を失なひしに由るものなり。たとひ又た葉や枝はそのまゝになし置くとも太陽こそ器械の支配人なれば、支配人の居らざる暗室、もしくは夜中等は、製造の業行なわれずして、炭素はそのまゝに吐き出ださるべし。夜中の空氣の人身に害ありと云ふはこれ故なり。

『然らば』と讀者は疑い給ふべし『木の葉なき冬は、空

氣は、如何に』と。こゝには又た適當なる說明の備あり。即ち冬は夏よりも荒風强よく、風多く、殊に貿易風とて、熱躰地方にて熱せられし温かき風が、遙かの天空を飛び來りて、寒國にて製造せし腐敗の風と、常に更換せり。熱國の風は靑み茂げれる椶櫚や椰子や、砂糖の木が毒物を全く除ぞきたる、清潔にして美麗なる風なるなり。追ひやられたる寒風は、重きが故に、下を通りつゝ留守居に行き、暫時を暮らす中、又たまた美くしくなりて、故國に歸省し、常に往來交換して止む時なし。

海草も亦た海水の掃除を爲す。博士フーカー氏の說によるに、高等植物の稀れなる兩極地方にては、海草は欠くべからざる腐敗瓦斯の掃除人にして、河の藻草も、亦た同じ事業を爲すと云へり。たゞに害毒なる炭素は、植物の滋養物となりて、その生長を助すくるのみならず、不思議の手はその間に働きて、實に驚くべき利用を爲す。今もし日常欠くべからざる木綿、キヤラコ、半紙の一片を取り、其の原なる白き纎維質は炭素と酸素の作りしものなりと云へば、人々いぶかり給ふべし。又た砂糖の原料なる、砂糖の木、葡萄、柿の甘きものを取りこの甘味は、炭素によりて作くられたりと云へば、驚き給ふべし。それと同時に蜜柑、大橙の酢、若しくはその皮にある油、或はその香を指ざし、之れも炭素が作れりと云わば、人々は益々不思議に撲れて、天女の杖にもあらんと疑がひ給ふべし。されどもこは詐はりなき事實なり、炭素と、酸素と、水素の三素が、化合する分量の、如何によりては、或は甘く、或は辛く、或は酸く、時には美香臭氣の樣々となる。松杉の脂の如きも、同じく水素と炭素が、化合せしものにして、それに少量の酸素を加わへし計りにて、全く變りたる物質なり樟腦龍腦は作らざるなり。熱躰地方にては同じく炭素と、水素の、化合して、種々なるゴム

は作られたり、手近く見んと欲せば、桃の脂もその一類なり。始じめ木より流れ出でたる時は、殆ど透明なれども、空氣に觸るゝに隨ひて、黒く且つ堅くなる。春の野に香氣もて人の足を引くべき薔薇、牡丹、菊のまよふべき香も、同じく無味、無臭、無色なる炭酸水素の。化合に成れるに外ならず。さりとは造化の妙工、殆ど極まれりと云ふべし。

文藝

秋の樂

秋は來れり。勉強す可く亦遊ぶ可き秋は來れり。余輩は親愛なる年少の讀者諸君に向ひて、少しく秋の樂を說かん。

塵は衣を汚し、都會は人を汚す。自由なること雀の如く愉快なること風の如き少年諸君も、常に炭酸瓦斯の滿ち渡る都の空氣をのみ呼吸せば、諸君の心身豈によく健全なるを保せんや。六日は勉強す可し、一日は遊ぶ可し。秋の野はまさに絶好の裝をなして、諸君の來遊を待てり。

晴れたる日曜日若くは大祭日に、一家打連れ、然らずば友達打連れ、都を離るゝ二里三里の田舍の野邊に遊び見よ。世は如何に廣く且美しきぞ。昨夜の微雨に空は天使の拭へる如く碧りに晴れ渡り、秋の日は天上地下殘る隅なく照り渡れり。稻田も色づきぬ。遙かの山の麓まで、地は一面に黃金の海となりぬ。田を隔てたる向ふの村の森かげに稻荷の旗チラ〳〵覗かるれば、此方の小路には早稻荷ふたる農夫の歩むあり。路の邊の一ト叢薄ソヨ〳〵秋風に打靡き、野川の土堤に紅なる蓼の花薄紫なる雛菊の花は水鏡に影うつし、彼岸花は崖に倚つて紅に、細菊の蕾は雛に立ちて黃なり。

百舌山雀の何處にか啼く聲聞きつゝ田舍路を歩めば、處々の野店に柴栗紅柿の人待ち貌に照れるあり、海の穂の上に雪の富士の聳へ起るあり、蘆花の間に帆影の隱見するあり。友達打連れ、草鞋若しくは草履穿きて、スラツキ手に打ふり。握飯腰につり下げ、日清戰爭の話しつゝ唱歌歌ひつゝ此間に往來するは豈亦快ならずとせむや。若し夫れ山近く住するの幸福を有する田舍の少年讀者諸君に到つては、秋の樂は更に深く且多かる可し。昨

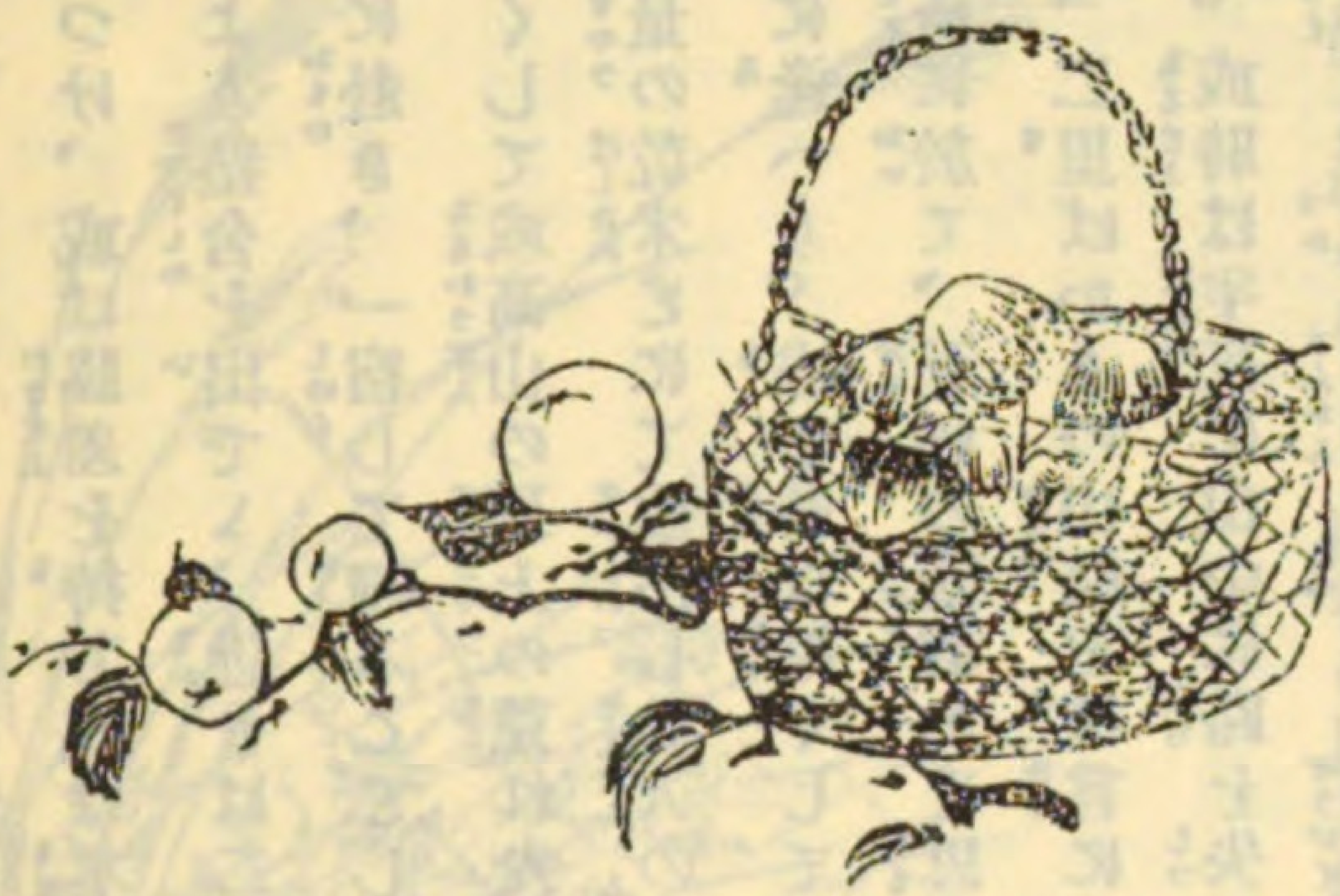


夜の風に落ちたる山の栗を拾ひ、昨日の雨に生ひ出でたる峯の松蕈を尋ね、落葉を踏むで山を攀ぢ、溪聲を聞ひて谷に下る、皆妙ならざるはなし。林の中に一枝早く染めたる紅葉の枝を折り、落葉かき集めて山畑の甘藷を燒き、葉かくれに二點三點紅の星の如く輝やける柿の霜に飽きたるを摘み、滑る足踏みとめむとして思はず縋れる葛に郁子の實の紫に熟せるを認めたる、何れか面白き限りならざらむ。秋の山には歌あり、詩あり、秋の山には文章あり、秋の山には音樂あり、秋の山には説教あり。少年諸君若し晴れし一日を山に送らば、其籠の香しき松蕈に滿ち栗に滿つるが如く、諸君の心には敎場十日の智識にも優る得ものあらむ。夏の樂は海にあり、秋の樂は野にあり、山にあり。記者は尤とも秋の遊を愛する者なり。都に來りて已に六年、秋になる毎に、店頭の目籠に檜の葉の間よりゆかしき松蕈の香を聞く毎に、紅柿柴栗の色を見る毎に、

故郷にありし昔の遊びを思はざるなし。其頃は記者は十五六の少年なりき。秋の頃に到れば、同じき塾舎に學べる同年の友五六人乃至八九人、若干の錢を懐中し、或は股引或は脚胖に足袋はきて草鞋括りつけ、柿甘藷握飯などを腰に結ひつけ、或は脇差を持ち或は木棍を杖つき、土曜の午後より塾舎を出でゝ、近きは二三里遠きは八九里の場所に赴き、一宿して歸ることしばしばなり。或る時は斯くして或高山の頂上の荒れたる堂に、十九年間水と小量の乾米とにて生活し仙人の修行を爲せる白髪の老翁に逢へり。或る時は斯くして或人少なき山の萱茅多き所に於て、巨蛇の鼾聲かと思はるゝ怪しき音を聞ひて、二里ばかりの山路を無言に走り下れることもありき。或時は半夜に山中に路を失し、竹木を束ねて松明を作り、遂に山間の怪しき小學校を尋ね出して此處に宿せることもありき。或る時は或る山家の紅葉の夕陽に美はしきを窃み折りて農夫に逐はれ、山畑の甘藷を堀りて逃げ出せしこともありき。或は山上に毛布に包まれて星光の下に露臥し、山より山を傳ひて海邊蜜柑の山に出で、蜜柑の重荷の下に蹌踉としつゝ歸る事もありき。斯る山行の後は、二日も三日も、脚部に酸を覺ゆることあれども、次週來ればまた出遊の誘惑を制し得ざりき。殊に愉快なるは、兎狩にぞある。兎狩の時節は、黄葉紅果の候より始まる。其時候に到れば、兎網繕はれ、時日定められ、出師



の準備中々に忙はし。日曜の曉二時三時の交、鷄聲纔かに聞へて曉月霜に冴ふるの時、三軍齊しく立ちて狡兎の山に向ふ。須臾に月落ちて野路闇く、木は人の如く家は岩の如く人は兎の如くなる間を、詩歌高らかに吟じつゝ行くに、二三日前より夜も眠り得ざりし吾等少年は、多く夢中に歩み行くなり。



夜已に明けて山に達すれば、重立たる者相議して網を張り、攻撃の部署を整へ、一聲の相圖と共に喊聲忽ち起り、木棍を以て樹を叩き、叢を打つ音山中に響き渡り、八方より兵士は騒ぎをなして兎を網の張られし方角に追ひ詰めむことを競ふ。然れども吾等少年は、多く半より山徑の歩み易きを擇み、或は蔦紅葉の美はしきを折り、或は木の實の紅紫なるを摘み、而して追擊の結果の明らかなりし後に或は喝采し或は唸呍しつゝ本隊に合するのみ。山に山一日狩り暮すは、疲れざるにあらざるも、晝食の握飯、渇せる時の岩間の水、是れ實に言ひ盡し難きの味あるなり。况んや足引ずりて歸りし其夕には、獲物の兎汁(大半は牛肉なり)の馳走吾等を待てるをや。

親愛なる年少讀者諸君よ、記者が昔遊を思ふあまりに、言の蕪雜に話の不作法に陷りしを咎むる勿れ。秋は實に樂む可し、而して秋の樂は戶外にあり。秋は實に諸君を樂ましめ諸君を敎へ諸君を健にせんとして待ちつゝあるなり。去て學べ、去て秋の校堂に學べ、去て自然の敎場に學べ。千古の敎育家ペスタロッヂーは逝き

て已に久しきも、ペスタロッツジーが依頼せし教師ペスタロッツジーよりも限りなく大なる教師は今猶存せり。

家　政

家庭の教育

府下某女學校の教師は、不思議にもその教しゆる生徒の家の風を、一々細まかに知れり『お良さんの内のおつかさんは、朝早くより起きて、せつ〳〵と働き、暇さへあれば仕事を能くなさいませう。』『お兼さんのお母さんは、芝居やよせがお好きでせう、一月に五六度はきつといらつしやいましよう、小説もお好でしよう』。『お力さんのおとつあんは、酒計り飲んでいらついやいませう、そして酔狂してあなたわ度々おぶたれなさいましよう』と、一々指して違ふことなし。生徒等疑たがいて、あの先生は何時の間に我等の家の内を見巡り給へるにやと云ひ合ひけるを、先生聞き付けて云ひける様『私は世話しふでざいますから、一々あなた方のお内を見廻る隙は御座いませんが、あなた方學校の行作は、慥しかにお内の風を顯らわす寫眞です』と云へり。然り小供は好く家の風を顯らわすものなり。殊に父よりも母親の風儀を習ふものなり。不始末の母には不始末の子あり。勤勉なる母には勤勉の子あり、遊びの好きなるもの、學問の好きなるもの、怒り安きもの、嫉妬深きもの、善良なるもの、邪悪なるもの、一々小供の心に寫つり、深く刻まり違ふことなし、されば小供を、善くもし、悪しくもし、役に立つ人ともし、無益なる物ともなすは、偏へに家庭にあるを知れば如何にして子供を教育すべきやと云ふことは、母たるものが殊に心に刻みて常に心得ざるべからざる問題なるを知るべし。

母の資格

人を敎しゆるには、先づ敎ゆる丈けの資格あるを要す。小兒を敎ゆる母も、亦た、母の資格を備ゆるを最初の急務とす。如何にせば、その資格を備へしものと云ひ得べきや。

第一凡ての事慈愛心より出づべし。母に慈愛心あらんとを求むるは、異なるに似たれども、その必要中にあり。或る人は己れが老後の發育を受けんがために小供を敎育し、或る者は現在の事業を助けしめんがために學ばしめ、ある者は人に驕らんがために敎へ、もしくは學齡年齡に至れるが故に止を得ずして義務的に學校に送るものあり、彼等は眞の慈愛を以て小供を敎ゆるものにあらず、利慾これ只だ一つの目的とこそ云ふべけれ、然れども小供を敎ゆるには決してかゝる目的にてはよろしからず、たとへ己れに不利益なるとあるも、不經濟なるとあるも、彼をして全たき人となしめ、一人前の生活を爲して不自由ならざる人となしめ、その一生をして世のため、人のために必要なる一生たらしめ、幸福にして利益ある生涯を送らしめ、何事も彼のためとの一目的のために、凡てを擲つの覺悟を有たざるべからず、之れを眞の慈愛とは云ふなり。而して此の慈愛を有たずして、行く先を知らず、舟を出だすもの、世には往々に見受らるゝなり。

第二は敎育者としての智識を有たざるべからず。たとへ、慈愛の點に於ては、一點の欠く所なき母なりとするも、不幸にして小供を敎ゆるの智識なき時は、手の折れたる畫工の如く、折角の慈愛も用ゆるに法方なし、故に間違のなき智識を先づ己れに貯へ置く、これ又た必要中の必要なる業にあらずや。

第三は上手ならざるべからず。たとひ又た、充分の智識を備へ、全き慈愛心に富みたりとするも、之れを小供に吹き込むだけの、上手、言ひ變ゆれば敎育の方法を知らざるべからず、或る人は『敎育は一種の技術

なり』と云ひけるが、實に名言なりと言ふべし。若し小供を敎ゆるに當りて、我の言ふ所を明白に彼に了解せしむるヿを得ず、大切なるヿを抜かして、不必要なるヿに力を盡くし、もしくは變化の道を知らずして常に一樣に陷り、小供を飽かしむる等のヿありては、敎を受くる所の小供は甚だめいわくなり、學校にあるは、一日中數時間に止どまれども、母の膝下に敎訓を受くるは、朝夕の別なく、休暇祭日に止まらず、凡べての時にあるが故に、若し間違ひたるヿを敎ゆる時は、不幸之れに勝りたるはあらじ。殊に敎師は多くの生徒を一時に敎訓するが故に、各々の性質に適したることを見計らひて、力を之れに盡くすヿは最もむつかしき業なれども、親は盡ぎられたる數人の小供に全力を盡くす好機期を有すれば、意志のよわきものには之を强めんヿを敎へ、傲慢なるは謙遜を敎しへ、輕躁なるは沈重を吹き込みて、各々その欠けたる處を補ふの最も眞地位にあるを思はゞ熟練なると否とは非常なる損德の分け目也。

第四は父母自らの性質にあり。最とも父母としての必要なる性質は沈重にして謹み深かく、忍耐ありて精密に、事に嚴重にして威嚴を失しなわず、勤勉にして快活なるを第一とす、或る一種の父母の如く、事に感じては小供を大切にいたわるを飴の如く甘まく、傍觀するものをして殆どいや味を感ずる迄に爲すに反し、忽ち他事に激しては、當り次第に怒り散らし、小供は罪なふして徒らにその的となりて啼くの氣の毒なる樣あるは最も父母として、愼しむべき性質の一つならずや。たとひ天性純眞なる眞兒といへども、父母の譴責常に甚だしき時は、のび〳〵したる美性を失しなひ、何事も父母の面前を逃がれんとするひがみ根性を作るに至るべし。これ又た父母が氣の短かきより生ずる結果として最も恐るべき性質也。されば小供を持ち給へ

る父母に、殊に多分の關係を持てる母親は、先づ心靜づかに己れが一身を顧りみて、彼を敎ゆるの資格ありや、彼を敎しゆるの方法を得たるや、實際己が智識に不足なきや、彼を叱かるは一時の怒りに任かせるにあらずして、眞の慈愛より出でしやと深かく思ひを廻ぐらすは何より大切なる務めなり之れ敎育者としてこの母が最初に思ふべき問題なりとす　（未完）

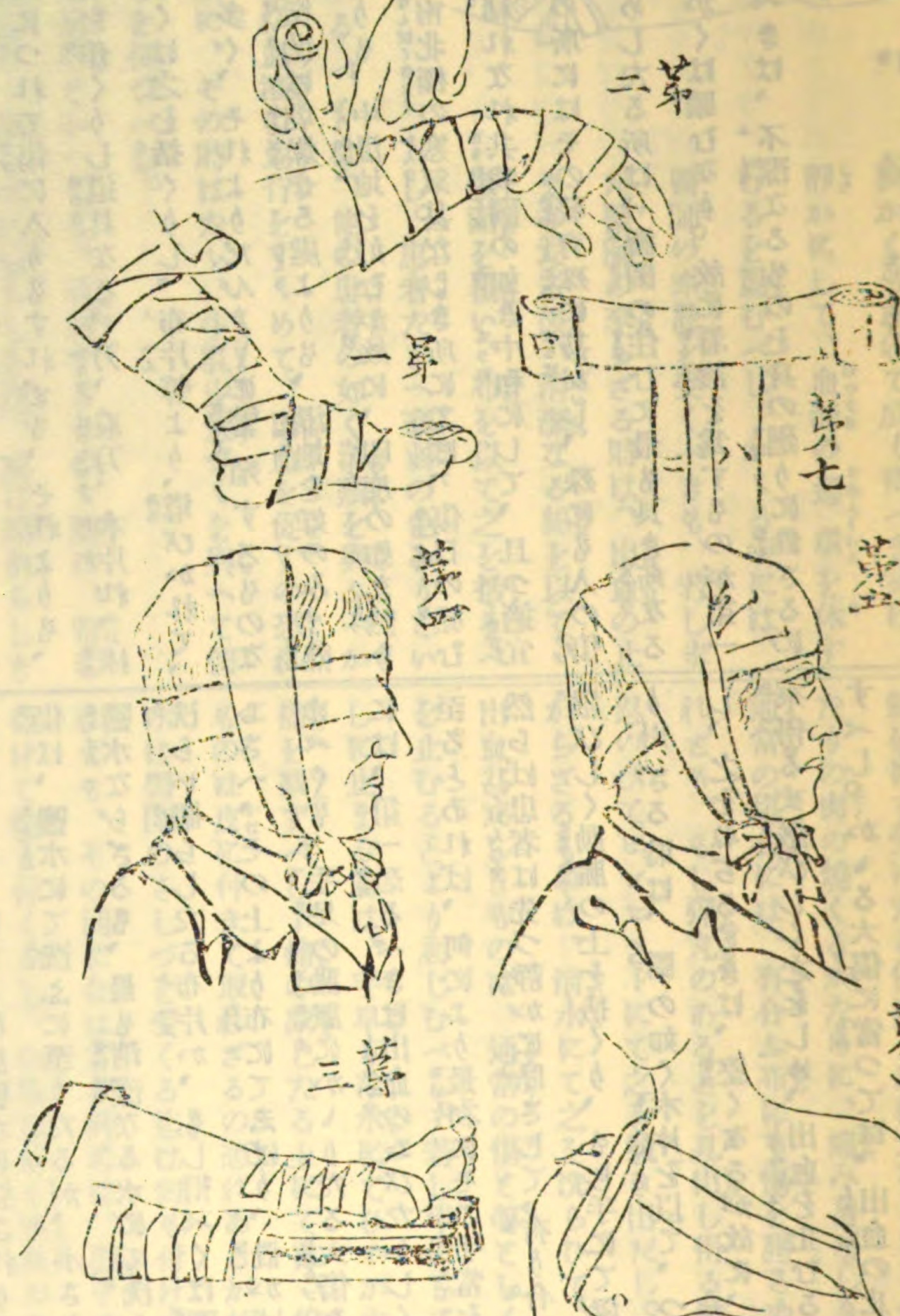
通俗負傷者看護法

日清の戰爭起こりて以來、看護と云ふヿは、端しなくも家庭間の問題となりぬ。實際戰爭に出でたる夫を持てる妻、直接に戰爭に關係ある子を有せる父母のみならず、我が國の前途を思もひ、戰塲にある兵士を思ひやる人々は、誰にても傷は如何にして醫すべきや、許判なる彼の地の惡水に當りたる時は、如何にして看護せんやと、達しも得ざる、されど親切に溢ふれたる心配を心中に燃やし給ふなるべし。今茲に看護のヿを記るさんとするは、それ等の人々に聊か慰さめを、與へんと欲するが故なり。

看護人と傷の關係

看護と云へば醫術にあらざるが故に、深かく病理を研究するには及ばざれども、一通の考へのなきときは、醫師の直ほしかゝつたる病をも、反て惡しくするが如きヿあり。殊に傷は不潔と、淸潔とに、非常の關係を有つものにして、看護人が不潔の手を以て不潔の布片を用ちひて傷を扱ふときは、左程ならざる傷もだん〳〵惡しくなりて、遂に生命にも及ぶヿあれば、傷が何故にあしくもあり、醫へもするかと云ふ原理を一通は心得をくべきなり。

さて傷の膿と云ふヿは何なりやと云ふに、言葉を變へて云へば一種の黴菌が、だん〳〵多く殖へて、生活を

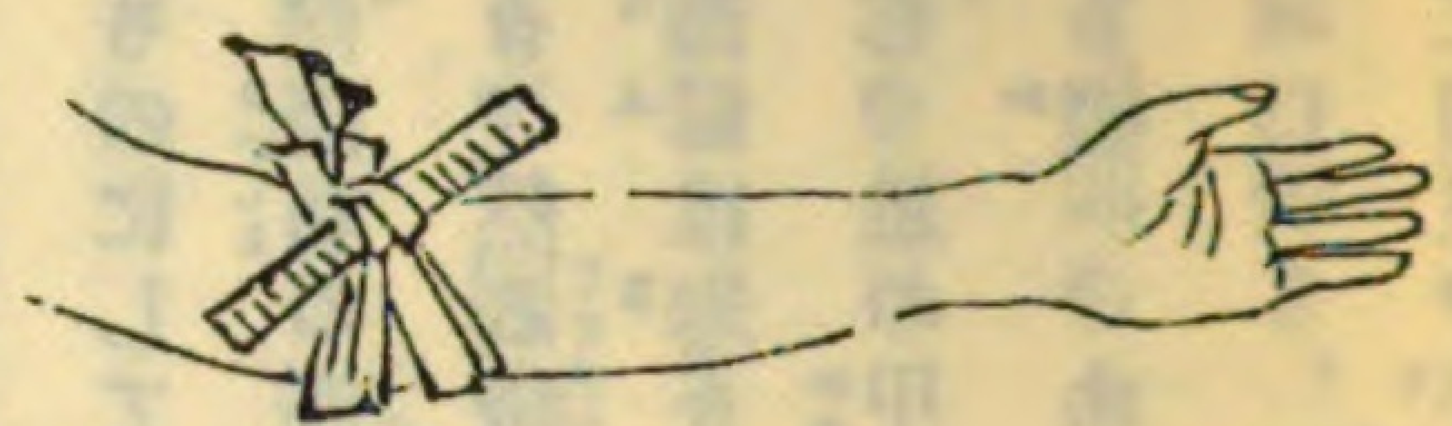


第一
第二
第三
第四
第五
第六
第七

始じむるとなり。此の黴菌は多少空氣の中にてあるが故に空氣につれて傷に入りもすれども、それよりも、多くは傷を作くりし道具なる、刀、庖刀、木片れ、棒片、もしくは之を括くりし、布片等より、導びかれて、入るもの多く、それよりだん〳〵に繁殖するものなり。此の黴菌は乾燥せる處よりも、濕地を好のみ、熱地寒地よりも、中温地を好むが故に、印度の如き熱き處又は、南北極の寒氣甚だしき所にては、傷口の膿むと甚はだ稀れなれ共我國の如き中和にして、且つ適宜なる温度の所にはその發育殊に甚だし、殊にも人の傷口など濕めしたる所は、黴菌の住むに最も良き所なるが故に、かくは膿むなり。故に看護を爲すものが第一に注意すべきは、不潔なるものを身の廻りに置ざるにあるなり。

切り傷の治療

近頃の醫學上の經驗によりて、石炭酸は傷口を洗ふに適當ならず、むしろ硼酸鹽水に勝されりとし、通常の傷は、鹽水にて洗ふに至りたるが、小さき傷ならば、鹽水ならざるも、最も清潔なる水にて洗らい、跡とを洗らい晒らしたる布片か、もし得べくは硼酸綿花にておさへ、その上より布にて志ばり、置かば、大低は醫ゆべくも。手足の動脈にかゝりたる大傷を受けた場合には、第一恐るべきは出血のおびたゞしくして、死に至るとあれば、何により最初にその手當を爲すべし。」然らば患者は先づ靜かに臥さして、有り合ふ布を以て、嚴びしく動脈の上を括くり、もし手にて嚴びしく括くり得ざる時は、圖の如く木片を以て、つめものをなし、之をねぢるときは、堅くなるが故に、かくして出來得る丈嚴びしく之をしめ、出血を止むるとを專一とすべし。かゝる大傷に當つては、出血の止る迄は、決して傷を洗らひ、もしくばその上を綿等にてつゝむべからず。專ら出血の止まらんとを俟べし。又患者は、其



傷の所を躰の他の部分よりは最も高かくもたげて成り得べき丈け、靜かにして、血液の巡環を休すむるを勤むべし。かゝる中には、醫師の來診を受くべきも、若し未だ醫師の來らざる時は、出血の止まりたる後、清潔なる綿を以て、傷面を覆い、布を以て之を括るべし。患者たとへ衰弱の色ありといへども成るべくは、他の患者の如く酒類を與ふべからず。之れ血液の巡行をすゝめて、出血を促すの恐れあるが故に、その時はたゞ、牛乳少量づゝを與へて醫者の來るを待つべし。

如何なる塲合といへども、看護するものゝ顔は、常に笑顔を含くみ、決して心配らしき顔、或は面倒らしき顔を爲すべからず。

鐵砲の傷の治療

鐵砲にて受けたる傷は、左程大ならざる傷にても、あたりの肉の焼くるがために、痛み甚だしきものなり。通常の塲合には、有合ふ布にて傷を壓さゆるこそよけれども、もし彈丸のあることを見出し得る時には、痛を忍びてピンセットにて之を拔き出だし。出血甚だしからざるものは、清水にて之を洗らひて、後括るべし。出血甚だしきものは、通常の傷と等しく、先づ出血を止むることより初むべし。若し幸にして表面の焼けしに止まる時は、手早く冷水にてひやかす時は、大に痛を減ずべし。痛の減じたる上にては、綿花や毛織のものは皮に付きて取れざるの恐れあるが故に、成る丈けは醫師のさしづを受くる迄は何も付けざることそよけれども、その間に合はざる時には、卵子の白味を筆に付けて塗り付くべし。白味は好く空氣の入るを防せぐの功あるが故に、用ゆるなり。

繃帶の卷き方

何の傷にかぎらず、繃帶は必ず看護人の手によりて、卷かざるべからず。然るにその卷き方を知らずして、矢たらに卷き付くるのみにては、屢々抜け落ちて、患者の面倒云わん方なし。病院の看護婦の卷きたるものにても、ぐざ〳〵して心地惡しきと屢々あり、通常足に用ゆる繃帶は一、二寸の木綿の切を、長さ一丈、もしくは二三丈に切りて、堅たく卷き物の如く、卷きたるものにして、もし足を之れにて包つまんと欲する時は、最初の所は、一と廻りか、二た廻り同じ所を堅く卷き、然る後だん〳〵に上ぼりて圖の如く卷くべし。看護婦は卷きたる繃帶を右の手に持ち患者に向かひて坐し、足の甲より、初じめて足の表にて、左の手にて持ち變へ、ゆるまぬ樣にして、又た甲にて右の手に渡すべし。

第二圖は、手の傷所の卷き方を示めせるものなり。手に用ゆるものは、足のもの程、長きを要せず。通常一丈足らずにて、充分なり。足にもせよ、手にもせよ、繃帶は皺の生じ、もしくは縮びしき所と、ゆるき所の出來ざる樣に、注意を要す。而してその終りに至れば、安全ピン、もしくは糸にて、縫ひ付くるか、然らざれば、端を二たつにさきて、兩方にわけ、それにて志ばるべし。

又た第三圖の如く、繃帶を一切れづゝに切りて卷き、一つの端を、他の片の端にておさへ、終りに長がききれにて括くる法もあり。

眼を傷きたる場合には第四圖の如く横と竪ての繃帶を兩横にて縫ひ合せ、一は周圍を廻わし、一は上下に、腮にて括るべし。第五第六は、頭部と、胸部の括り方を示めせるものにして、是等は別に面倒はあらざれども、最も困難なるは、背の後部、即ち腰の上の處を志ばるにあり。堅くしては、腹に痛みを覺ぼゆるの恐れ

あり。ゆるくしては、抜け落つるの心配あり。故に第七圖の如き、繃帶は最も、能くその目的にかなふものなり。即ち上の兩端なるイとロとの所を、腹の兩側より巻き付け、下のハとニとの所を股部より兩足に一、二囬巻き、その端を腹部にて括るべし。何れの時にかぎらず、繃帶は清潔なるを用ちひ、且つ何時にても巻き變ゆるに適する樣、巻きたるかわりの繃帶を備へをくべし。

風呂と養生

風呂の種類二十餘種

西洋には種々なる風呂ありて、現に何れの家にても行なわれつゝあり。通常用ゆるものと、藥として用ゆるものと、合せて算へしに、概略廿餘種を算へ得たり。即ち牛乳の風呂、油の風呂、藥の風呂、夕立風呂、濕ひたるシッツの風呂、海綿風呂、冷水風呂、灌水風呂、蒸氣風呂、清水風呂、温水風呂、熱水風呂、鹽風呂、其他臀風呂、足風呂、膝風呂、又は濁り風呂と浴稱せらるゝ頸丈け出だす風呂、又は藥の中にもソーダの風呂、アンチモニーの風呂、辛子風呂、其他五六種ありて、風呂の種類を全く數ふると、殆んどむつかしき位なり。

第一 冷水浴

何の風呂を論ぜす、凡て風呂は皮膚を清潔にし、身躰に愉快を與たへ、リウマチス神系其他に功あるが中にも、冷水の健全なる人に功あるは、殆ど他の凡ての藥に勝るものあり。健康なる人が冷水を行ふには、朝の食前こそ、最も好き時にして、温度は華氏の四五十度を下るべからず。通常十分乃至十二分間の入浴を適當なる時間とすれども、其間もし惡寒を感じて、唇青く身振る如きことあらば、その人は未だ冷水浴を爲す

程、身躰健全ならざるものなるが故に、暫時止むるを了とす、殊とに幾分神系質にして、さ程健全ならざる人は、冷水と云へども、其實華氏の八十五六度位のものに、日中短かき時間を以て、一寸入浴するの後、二度も三度も入るが如きとあらば、反つて大害を生ずべし、殊にも小兒は如何に健全なるものなりとも、大人の比例には成りがたければ、冷水に入るゝため、胃の不消化或は、肺病等を起すの心配あるが故に、全き冷水は先づ、さけし方安全なり。もし保證し得る健康の小供には、初めに温浴を用ひて、充分に身躰の温まりたる後、一二分間冷水に入るゝは、反つてよかるべし。最も大人小供にかぎらず、冷浴後は、粗らき布片、もしくは麻片にて「少しく赤くなる迄磨するを必要とす。冷浴は健康なる人と雖も決して食後滿腹の時、或は走るか、甚だしき勞働を爲せし後等は、用ゆべからず。

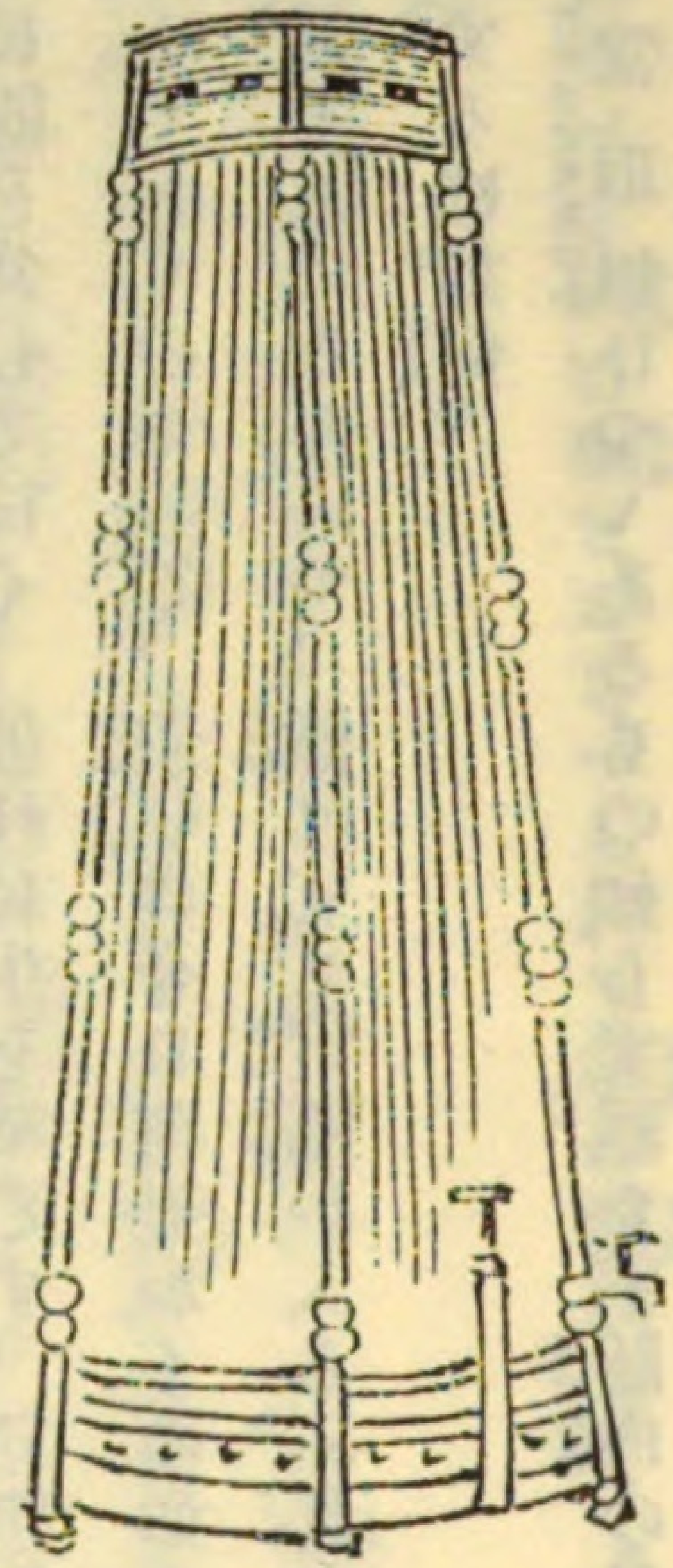
第二　微温浴及び暖浴

温浴は健康、虛弱、小兒、大人の躰を論ぜず、誰のためにも最も好き沈系劑なり。微温度は華氏八十五度より、九十五度迄を適度とし、旅行に勞かれたる時、もしくは勞働によりて疲勞したる時等には、最も良劑なり。又た皮膚病のもの、リウマチスのもの、痛風、風邪、頭痛、咽喉加多留等のものは、華氏九十六度より、百度迄の暖浴を用ゆる時は、睡眠を催ふし、身躰の安樂を感ずべし。

第三　夕立風呂

圖に示めせるは夕立風呂の仕掛なり。中は極々簡短なるものにして、用ゆる人のためには極めて快よきものなり。即ち天上の所に、一枚のしきりの板ありて、小さき夥多の穴を穿ちたり。穴のあきたる板の外に、亦た穴のあかざる一枚の板ありて、確つかりと密接したるが、之れは中に入りて浴する人の、自由によりて、明けもし、閉ちも爲し得る樣に、出來たり。さて温湯

冷水もしくは、熱湯、望み次第のものは、穴の明きたる板の上に、溜まれる樣に仕掛けたるが、浴する人は、中の椅子に坐して、强よき夕立、弱き夕立、望み次第の板を動かしつゝ、自ら夕立を受くるなり。之れは米國や英國にては、之れは大抵の家に作り備へられたると、日本の家に風呂場あるが如き容なるが中に、貧づしきものゝ工夫になれる、極めて簡短なるものあり。



即ち大なる手桶の底に、穴を明けて、栓にて閉ざし、風呂場の桁に下げ、いよく\用ゆる段になれば、栓を抜き、蒸露の口の如き、穴の澤山明きたる口をさし變へて、之を用ゆ。中にその風呂場さへ持ざる人あり。その人は古き洗濯すべきシャツ（布の幅廣き片）を用ひて、桶の圍りに括り付け、即座の天幕を作りて、その中に入りて、夕立を受く。之は極めて簡畧にして又た面白き一方なり。（續）

妊娠の婦女

やぎ生

妊娠したる婦女は、專ら其身の保護に意を用ゐ、胎内の兒をして安全ならしめんと勉むるより外あらざるが如し。勿論これは勉むべきことの第一に置かざるべからずといへども、倘この外注意を爲すべき要件あり、即妊娠婦女平常の行爲これなり。

胎内にある中は五感其働を爲さず、何ぞ知ることを得む、兒の性質なるものは、出産後の敎育にあるのみと、この言一應尤に聞ゆれども、事實左樣のものには

あらざるなり。

毎々新聞紙上に於て散見するところなるが、某町鰻屋の婦は恰も鰻の如き顔の兒を生めり、某村漁夫の子は鱗あり、某牛肉店にては牛首の兒を出産すと、道路これに說を為して曰く、彼れ殺生を業とす、其怨恨報し來りてかくの如しと、開明の今日何ぞかくの如き怨恨を為すものあらんや、然れども實際かゝる不具の兒を生ずるは如何。

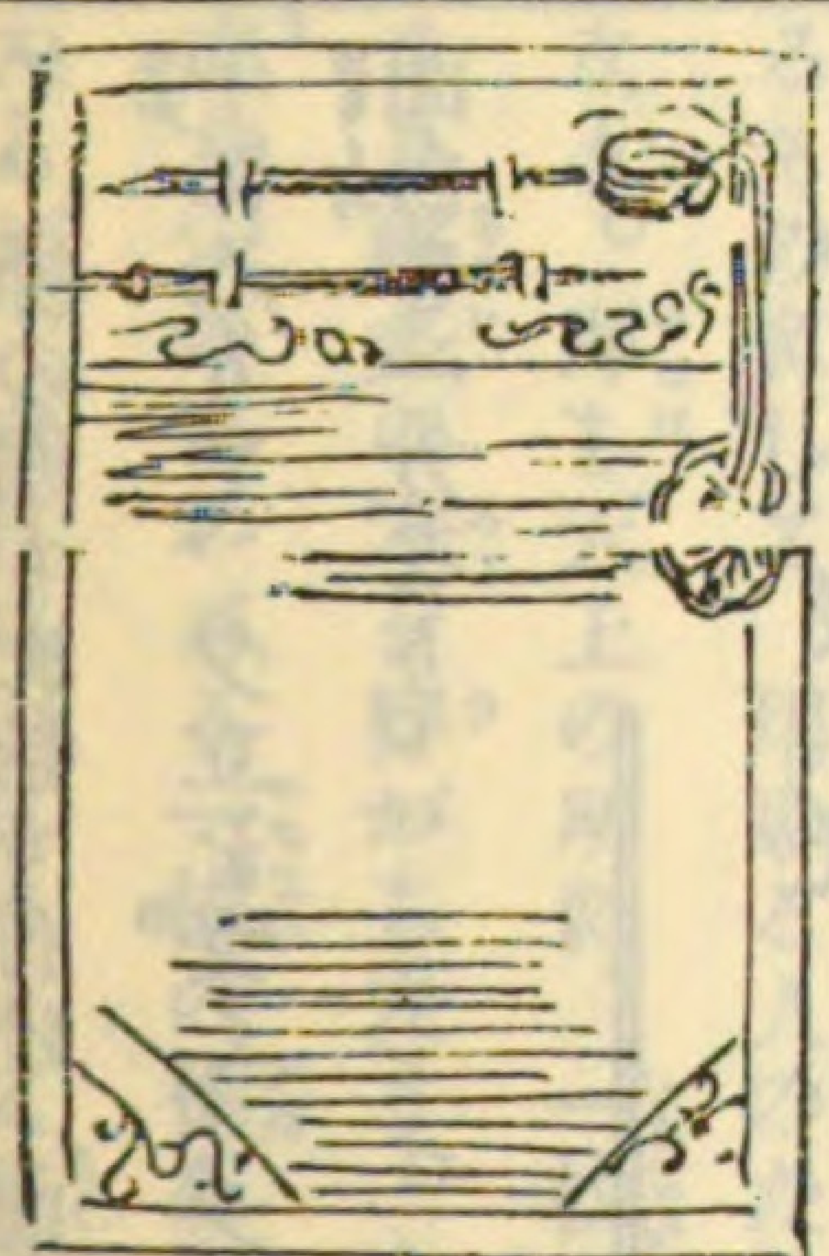
平常取扱ひつゝあるもの知らず識らず胎內の兒に感染し、遂にかゝる不具者を生ずるに至りしなり。かくいふときは洋酒屋にては壜に似たる兒、菓子屋にては菓子に似たる兒を生ずるならんと笑はるゝものあるべし、然れども胎內の兒は、一種の生氣に感染するものなれば、かゝる死物には毫も感ずることなし。

妊娠婦女の行為は、かくの如く胎兒に感染すべし、故に妊娠者にして懶惰淫猥なれば、兒も亦懶惰淫猥なるべく、勤勉正直なれば、兒も亦勤勉正直なるべし、胎內に在れば何も知るべき道理なしとて、不正の所行を為せば、恐るべき感應を兒に與ふることあらむ、妊娠者は擧動を苟しくもせざるよう、心がけられたきものなり。

手藝案內

書板（ライチング、タブレット）

次に案內する書板は西洋に於て重に貴女諸卿達の玉机の邊に飾られ實用ともなるべき品なり、これを製作せんとならば書物の上表紙にある如き少し重き紙板(又は木板)を取り、其上部の一端に白もて縫箔したる



「リチン」(麻布)を表裏に蔽ひて右の紙板に縫ひ止め、

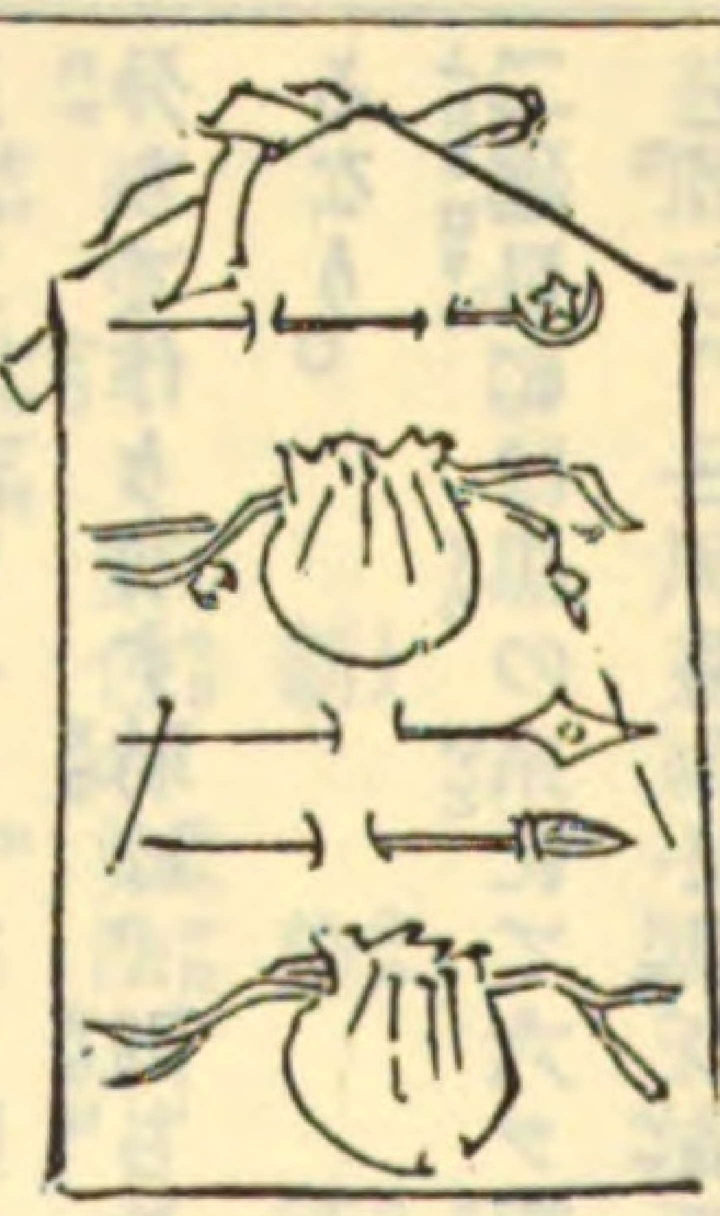
別に革又は紐にて輪柵をつくり、これに洋筆軸、鉛筆小刀等を挿むやうにする、墨壺を措くには圖に示せる右方上端の所に縫ひ止めらるべし(但し墨壺は旅行用とて携帶するも覆流の患なきものに限る)。

扨下の方の兩角は失張り縫箔ある「リチン」を用ゐ、其内側の一方はワザと縫はずして、板大の紙が滑り込みて之にて紙を支持し得るやうにすべし、斯くする時は書るべき紙は確とおさへられて筆の運びもまゝなるべし。

右出來爲さば圖に示さるゝが如く其の一方の横側に筆拭物を製するを怠るべからず、之を製せんとならば少さき環を其要所に打ちつけ、其環に「リボン」(絹紐を通じ其紐の先に花の如き形のものをつくる、これ則ち筆拭物にして山羊の革にて製するを最可とす、筆拭物は一個に止らず必要によりて幾個にても宜しけれども、其花形は成るべく種々の色合を取合するは美麗なり、併し西洋人が通常用ゐるものは櫻草を形りて色を黄色とし、瓣の外部と中心とは金色を帶びしむるを通例とすれども、日本人が之を製せんと欲せば自身の好む所に從ひ此上に工夫したらば面白かるべし。

「ピン」と「リング」の爲め

「ピン」(針)と「リング」(指輪)の爲め如何なるものが製せらるゝか、圖に示すは隨分美麗なる製作品なり、これは旅行等の時最も必要なるものにして大概の婦人は容易に製し得らるべし、其形はいろ〳〵につくり得らるれども、通常



西洋人等が用ゆるものは圖に依りて明なるが如き、屋根形なり、布帛地は繻子を用ゐ、其周圍を雁の織毛にて織りたる毛織にて緣を取るなり、其大さは幅五寸位長八寸位にして其中の上下に適宜の大さに二個の袋

を置きて、指輪の如きものを入れ置くに便利とす、種々なる針(留針、仕事針、飾針等)は圖に示さるゝ如く安置せられ得べし。

其頂上には狹き繻子の紐をつけ置き、此針挿指輪容を巻きて一巻にする時、此紐にて宛も巻軸を巻きて結ばらるゝが如き用を爲し、旅行の婦人達に調法なる手細工品なり。

毛絲の坐蒲團

針は鈎針を用ゐ用絲は任意に宜しけれど毛坐蒲團なれば餘り花の如き華麗なるは避くべし、但し色々の糸を用ゆるが面白し。

最初三個の連鎖編を作り、一の目へ五度編み、次の廻にて一の目に二個編み、一個隔に一廻り作る、次の廻は二個隔に一個宛増し加へ三十六個の目數に編み行くなり、之を六分して異色の毛糸を入れ、之より糸二本にてかくれ編となる初め前の色糸(譬へば黒にて)四個の目に六ッ編み、白の繼ぎし糸にて二個編み、又四個の目に六個編むべし、又繼ぎし白糸にて二個編み、また四ッの目に六ッ編み、又た二ッ編み又四ッの目に六ッあみ、二ッあむことを爲し、四ッの目にて六個編み、又た二ッ編むべし、斯く同じき編法にて之を六個所に分ちて作りなす時は、則ちこれが最初の一廻りとはなるなり。

二廻目には黒の糸にて六ッ編み、白の糸の處にて一個を増し、三ッ編み又黒の糸にて六個編みて、白糸の處にて三ッ編むなり、之も同じものを六個所に造ることゝ知るべし。

三廻目には黒糸の處にて五個編み、白糸の處にて二ッを増し加え、五個編み此廻も同じきものを六個所に編み行くなり。

四廻目には黒の糸にて四個編み白の糸にて三個を増し、八個編をなし、是も又各六個所に分ち作る。

五廻目には黒糸三個編み、白糸にて二個増し加えて十個編む是も又各六個所に造る。
六廻目には黒糸二個編み、白糸は五個編む、黒糸二個編み、又た白糸五個編み、是も又各六個所に造る。
七廻目には黒糸十二個編み、白糸二個の中へ一個を増して三個編み、之も六個所に作る。
八廻目には黒糸を十個編み、白糸を三の中へ二個増して五個編む、是も六個所に造る。
九廻目には黒糸八個編み白糸は以前の五個の中へ九個編む、是も六個所に作る。
十廻目には黒糸六個編み、白糸を以前の九個の中へ十三個編む、是も亦六個所に製す。
十一廻目には黒糸五個編み、白糸は以前の十三個の中へ十九個編む、其後は同前。
十二廻目には黒糸三個編み、白糸は以前の十六個の中へ十九個編む、其後の編法は同前なり。
十三廻目には黒糸三個編み、白糸は中の以前の十九個へ二十個編む、其後は同前。
十四廻目には黒糸二個編み、白糸は以前の二十個の中へ二十二個編む、其後の編法は同前。
十五廻目には黒糸一個編み、白糸二十三個を作る、其後の編法は前と等しく各六個所に之を造る。
右に述べたるが如き順序を追ふて編み行く時は白黒糸を以て、一尺又は一尺五寸又は二尺の座蒲團を製し得らるべし。

新染術

ログウード紫色の染法――水四斗五升五合を滿たしたる桶を懸竿の下に置き、それより以前に明礬百匁膽礬十五匁を熱き湯にて溶解したるものを、右の水桶中へ攪き混ぜ、染めんと欲する物品を此液中に浸入し置く事凡二時間にして取り出し、更に清水を以て洗滌する事兩回にして能く其物品を正しく整へ、其端より懸竿

に疊みかけ、水氣を去らしむべし、若し前の液中に二時間以上を浸し置く時は、膽礬の銅器にて染品に汚點を生する患あれば能々時間に注意するを要す、又別桶に清水四斗五升を入れ、「ログウード」の煎汁を適宜に注ぎ入れて能く攪きまぜ、此液中に以前の染品を浸し置くこと三十分時間にして再び取り出し、桶中に「ログウード」の煎汁を增し加へ、再び染品を入れ浸すこと三十分時間にして取り出し、然る後に桶中の水液を流出し去り、更に前同量の清水を充たし、「ログウード」の煎汁を新に注ぎ入れ、染品を入れ浸すこと前法の如くにして之れを取り出し、十分の色合となりたるを見て、清水を以て洗ひ出し、能く水氣を絞り去り煖室に於て蔭干と爲すべし。

紅汁の製法――紅花五百匁を盛りたる桶中に清水を注ぎ入れ、長き竹の箸もて能く之を攪きまぜ、十分に濕して放置する事廿四時間なるべし、但し其間も之を攪回すこと四五次にして滿時間に至り毛にて製したる氷嚢の如き篩に汲み移し、其液を流し棄て篩中に留る所の紅花を桶の中に戻し、再び清水を滿たし以前の如くに取扱ふべし、連日反復して此法を行ひ、紅花の纖維を膨脹せしむるに至り、之を例の毛篩に汲み移して殘さず、又別器に眞珠灰六十匁を入れ其中に熱き湯少しばかりを注ぎ入れて能く之を溶解し、更に別器に温湯三斗を滿たし、前に溶解したる眞珠灰を注ぎ入れ、能く雜ぜ合せ前の毛篩中に留まる紅花を此液中に投入し竹箸を以て攪ぜ和すること凡十五分時にして又別桶の口に細き棒を二本十の字に渡しかけ、之に白毛氈を覆ひ掛け其上部に毛篩を据ゑ右紅花を汁と共に汲み移す時は、紅花は篩中に留り、液は毛氈を徹して桶中に滴り落つべし、又別器を以て眞珠灰三十匁を溶かし、別桶に温湯三斗を滿して其中に溶したる眞珠灰を混和し、篩中に留まれる紅花を投入し、暫時手を以て揉みひね

り、悉く其紅分を絞り出し、之を毛篩に移し、其の留まる所の紅花を投棄し、桶に落ちたる汁液をたくはへ、更に別器に酒石酸百匁を入れ其中に清水を注ぎ入れ、それが溶解するを待ちて(但し此れに分量なしと雖も酒石酸を水に溶かし其酸氣の食用酢の如くなるを見て度とす)右に蓄へたる汁液中に此酒石酸水を少許宛漸次に注ぎ入れ能々注意して酒石酸水注入毎に箸を以て手早く攪ぜ殘りなく注入し終り、長さ一丈八尺廣さ三尺の清潔なる天竺木綿を四ッ切にし此液汁に入れ浸し五分時間許手を以て揉み捻り、液中の紅分を木綿中に吸收せしむべし、尙ほ其儘に浸入し置き二晝夜の間、時々手を以て揉みひねり其後之を取り出して清水を以て能く洗滌し、又別桶に水を滿たし少許の酒石酸を溶かし(其溶度は酒石酸を水に溶かし其水を味ふに少しく酸味を覺ゆるを以て度とす)又此水中に浸する暫時にして取り出し、水氣を絞り去り、日蔭にて能く乾し置き、絹類を染むる時に臨み、此紅木綿に吸收したる紅分を用ゆれば可なり。

社交一斑

流行の栞

羽織

春夢

男子用——紋附には表黑七子裏緞子たつけ紋は鯨尺九分の大さにて三個所に置きたるもの一定不動の流行さし、次は表黑羽二重、黑縮緬に緞子或は綸珍の裏な川ゐ紋な鯨尺一寸にして五個所につけたるもの又流行の一部さす、他は奉書の表な黑或は鐵色の三紋に染め甲斐絹の裏なつけたるものは普通の流行さ知るべし、縞物に至りては一市樂、二絢絲織、三風通お召の細き小紋、四繫ぎ絲織、五結城紬、六大島紬、七節絲織、八鉛錢縞、九秩父縞、十以上の織色無地にして裏は一綸珍、二緞子の脊縫模様、三緞子の一味模樣、四色又は縞甲斐絹にして綸子は縞物には餘り用ゐさるが如し。

婦人用――紋附には言ふ迄もなく黑縮緬の三紋なるべく次は同品の五個紋にして次は小紋縮緬の三紋とす、其柄合は割山椒、鶉、屋根板、大小霰、大小行儀、行儀霰、角通しにして堅海鼠、紹菊に最も新形なるも少しく澁氣に傾くが如し、而して派手を好む向には、高砂染(おぼろ染)にして其柄は紅葉、菊、牡丹、櫻、觀世水類を流行の最なるものとす、次に縞物に移りては風通お召の裏に繻珍には緞子の裏を用ゆるを贅澤的流行の最なるものとし、次は縞お召、山繭織の類とす、

衣服

男子用――上着には一樂、次は絢糸織、繋糸織、結城紬、大島紬等にして其柄合は紺地に鼠の大名筋及肉色白茶の微塵、刷毛目、崩し第一の流行に適せり、次は銘線、節絲、秩父縞にして是等は價の廉なるものなれば丈夫向の流行と知るべし、裏は花色絹にして中花色と淡花色は互角の流行なるが如し、但し丈夫向の裏には胴を絹にして裾を羽二重金巾を用ゆるは言ふ迄もなし、下着はお召、一樂の風通織、糸織の變地色、本塲八丈、大島紬の變絣、米琉球等を重なる流行とす。

婦人用――貴族的の上着には前記の風通お召にして柄は今春の本紙に案內したるが如く行儀あられ、横波うろこ、ひぢき、立波つなぎ、吹雪、鎧やま、割山椒、大小あられ、角通し、算盤つなぎ、石たゝみ、たから七寶、がんぎつなぎ、海鼠がた等にして令孃向には鶉皮、寳つなぎ、ちがひ矢、斜波、亂菊、雲龍、立田川、横びしつなぎ、伊達染縞等とす、扨右の下着に古代松竹梅、雲鶴、ぼたん、古代花桐、しのぶ、行儀菊、笠わくに雨龍の白紋二羽重、淡利久、淡ふぢれづみ、ぎん鼠、櫻ねづみ、お召ねづみに染めて仕立合せば無類の贅澤品無類の流行品なり(此品にて被布を製するも面白かるべし、色は黑、お召ねづみ、藍鼠を可とし、令孃向には利久鼠、藤鼠、櫻鼠を可とす)裏は表の地色に應して變色の縮緬をつくべし、次は縞お召の上着に更紗縮緬の下着を合せ、裏は花色絹をつけて着用せば所謂出す入らずの流行なり、次は山繭織、越後紬、縞八丈、銘線縞等の淡地色にして秩父縞は丈夫向として相變らずの需用品なり、

平民的衣服――羽織衣服男女を通して着用せられ得べきものを記せば、瓦斯糸結城、第一にして此品は綾織の珍奇のものあり殆ど眞一樂の如く、細地の變柄ありて眞糸織の如く直段の割には存外價値ありて流行の勢日一日と其度を進めり、次は糸入結城にして相變らずといふべく、他は細双子及地双子等とす、而して特に男子用羽織には瓦斯双子

を以て第一適品とす。

七歳着の祝衣

毎年十一月十五日は女子七歳の祝賀なれば其親達は競ふて兒の爲めに美衣を調ふる習慣とす、故に其衣服新調の栞を案内し置かん。

第一の流行ともいふべきは縮緬の裙模様三枚重にして地色は藤色、紅掛、淡れずみ、淡利久、又はうす紫に白茶のぼかし、黒に肉色のぼかしにして模様は遠山に鶴、雲鶴、四君子、たつた川、垣根きく、古代松竹梅、菊水、筏等とす、而して下着二枚は上着と同色にせず、殊更に他の色に染め置きて、或時の二枚重に着用し得らるゝやうにするを德用向とす、故に中着は通しにして下着一枚を胴拔にすべし、次は上着一枚を模樣に染め、下着二枚を幽禪縮緬とし又は三枚とも幽禪縮緬(但し下着二枚は上着と同模樣を用ゐず)にするも可憐なるべし、(以上一組の價格は二十五圓より四十圓迄々略本裁と知るべし)扨之に合すべき帶は糸錦を第一とし、次は小柳織の飛模樣又は博多織とす、價は糸錦にて六七圓より三十圓迄小柳織にて三四圓より六圓迄、博多にて五六圓の間なりと幅は鯨尺一尺二寸より一尺六寸なり。

呉服物の價格

黒七子	六圓より九圓
同上	十圓より十四圓
黒奉書	四圓半より六圓
黒羽二重	六圓半より八圓
同上	十圓より十三圓
黒縮緬	七圓半より九圓
同上	十圓より十五圓
小紋縮緬	六圓半より九圓
風通お召	十圓より十四圓
縞お召	六圓半より九圓
市樂織	七圓より九圓
同上	十圓より十五圓
絢糸織	十圓より十三圓
同上	十四圓より十八圓
平糸織	六圓半より九圓
山糸織	三圓半より六圓
緊糸織	七圓半より十圓
同上	十二圓より十五圓
節糸織	三圓より四圓半
同上	五圓より六圓半
銘線	同前
本場八丈	四圓半より六圓
縞八丈	三圓半より六圓
秋川八丈	弐圓半より三圓半
結城紬	五圓より五圓半
同上	六圓より六圓半
太島紬	八圓より十二圓
絣紬	六圓より十圓
米琉球	三圓より四圓
秩父縞	二圓半より三圓
緞子裏	二圓半より三圓半
同上	四圓より六圓
縮珍裏	同前
綸子裏	一圓八十錢より二圓半
甲斐絹裏	一圓より一圓半
花色絹(一疋)	四圓より八圓
本紅絹	五圓半より八圓
糸好紅絹	四圓より六圓
羽二重金巾	四十錢より一圓二十錢
花色金巾	四十錢前後
同木綿	四十錢より六十錢
同上	七十錢より壹圓
瓦斯市樂	一圓六十錢より二圓半
瓦斯結城	同前
糸入結城	一圓より一圓三十錢
瓦斯双子	一圓半より二圓七十錢
細双子	一圓より一圓半
地双子	五十錢より一圓

以上の相場は昨年の當時と大差なきも或ものによりては一割方の下落を示せり、右に示せる價格は日本橋區白木屋にて聞き得たるものなり。

(因に記す衣服購求の爲め府下重なる呉服店の賣出は本月一二三の三日間白木屋が始め越後屋等大丸及松坂屋等は已に賣出を終れりと聞く)

一種の髮掛

形は圖に示せるが如き髮掛流行す、地は縮緬にして兩端に絹糸にて縫取したる可憐のもの、色は淡藤、紺青紫、紅、濃淺黃等最も多く行はる。

團子坂と入谷、菊の流行風

團子坂の造り菊は大略は前々號に記したるが目下頻りに菊附け最中にして本年は競ふて日清事件を取仕組むに付前年よりは何れも人形多く隨て費用も掛る由なり聞く大掛の分は一軒四五百圓乃至三百圓にて職人は悉く染井の植木屋より雇入れ一人の手間賃は五十錢にて一家二三十人つゝを要する由而して今廿五日より開場する同所の造り菊各々誇稱するものを聞くに

植重　は大鳥公使と大院君が南大門乘り込みの場は他に比類なき裝飾を施し其の舞臺の下より塊木石を以て岩窟の如くに作り之に美麗なる菊を配置せる等は十分の意を用ひたるなり此外高さ二間餘の一本幹數十輪の大輪菊并に盆栽菊數鉢の配置花壇菊等は他家の比に非ず

植惣　は間口の舞臺十三間へ牙山平壤大戰爭の場を出たしたるは他に其比を見ざる大掛りなり殊に新聞記者が大木を小立に取りて此激戰を筆記する樣首と手足は器械を用ひて動かし恰も實地の如く見へ仲間の者も此趣向に感服せり此外一本幹千輪咲き大花壇等も實に見事なり

萩風園　の日清大戰爭燒物の大箱庭も非常の好況にて總て城廓、軍艦、武器、將校、兵卒迄燒物なるが實に緻密の細工なり此の燒物は九州の入川連某の手捻りにて作りたるものなりと此箱庭は既に購入者あり又約束中のものもありと此は他に持行き見世物にせんとするものなるべし

蔵親　は清艦沈沒の場にて清兵の波上を浮沈する樣を見せ加ろに我大軍艦を作りたる等は是又他に其比を見ず

植梅　は大舞臺の外に二年越の千輪咲き大菊は大自慢にて是又其辛苦不

思議さ云ふべし
入谷の菊は各植木屋とも過廿日より鉢植菊を飾り付けて縦覧を許すよしなるが本年は中々一般に出來宜しく既に各家とも菊花の口を切り初めたるが其見頃となるは次の日曜日頃なるべし中にも(丸新)が一等にて其菊も多く上花多く且大株なり本年の大輪ものは廣島産清涼殿、山家の壽、玉龍殿、萬花長、寶船杯にして此外四京産の高尚なる青簾内と云ふ細しべものもあり又た本年の新花もの北海道産の品ありて追々咲き出すと云ふが既に花の咲かぬ内より注文賣れ口多しと。

日用品物價

◎白米(一圓ニ付) 一等白米七升〇合●二等白米七升二合●三等白米七升五合●四等白米八升〇合●五等白米八升五合
◎雜穀 ●本貫大麥二斗三升五合●脇埼大麥二斗三升五合●肥後上小麥一斗九升五合●同麥安二斗〇●船橋小麥一斗九升五合●常州小麥二斗〇二合●下總小麥二斗〇●千葉小麥一斗九升七合●札入竹林麥一斗四升五合並一斗六升〇●上割麥一斗四升五合並一斗六升〇●佐野搗粟一斗三升五合●稗五斗三升
◎鹽 ●赤穗三俵八分五厘●大鹽并に八家三俵九分五厘●本齋五俵五分五厘●新齋五俵九分五厘
◎種油 ●荏十五圓八十錢●桐九圓●新胡麻十二圓●久ト十四圓十八錢●地水九圓十錢●いせ函十圓十五錢●坂水十圓二十五錢●星印十圓二十五錢●井桁十圓十五錢●イ印十圓十五錢●チャスタ一圓七十四錢●タンゲ一圓七十二錢●ホーキ一圓七十五錢

雜録

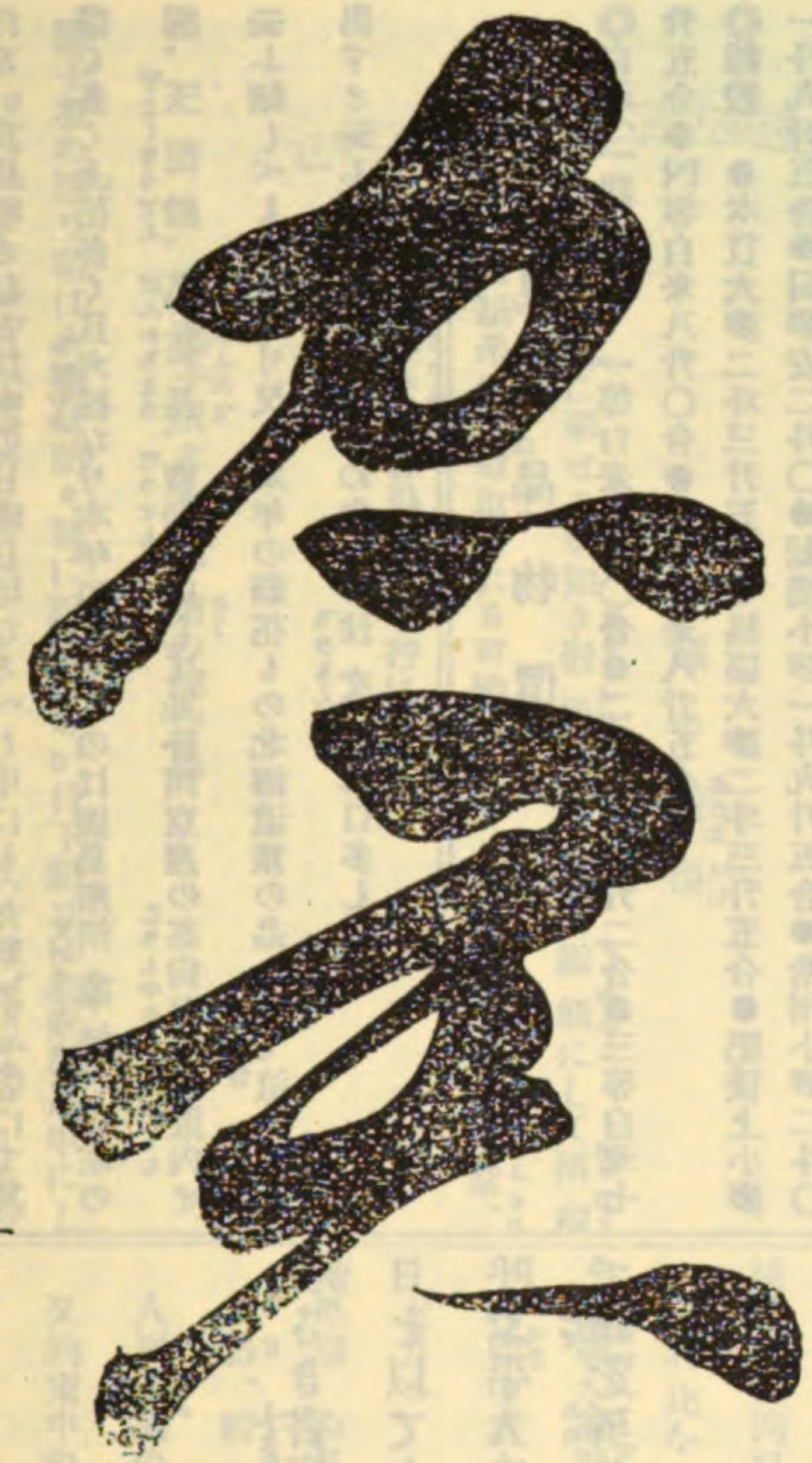
小さき書家 (南海鐵門)

少さき書家を宮本正雄門と呼ぶ、明治廿二年二月廿八日を以て土佐に生る、故に南海の號あり、父は重作と呼ぶ平人にして正雄門は其長男たり、生れて穎悟好んで筆を弄し字を作りしかば、父甚だ之を奇とし試に小



南海鐵門

學校用の習字帖を授け見るに其筆途習練の人を凌ぎ、三歳姓名を記し單牘を書し啻に筆技の巧妙なるのみならず精熟強記人を驚かすものありといふ、廿六年の末香川の書家岡鐵山の門に入り技益々進み鐵門の號を受く、それより鐵山の手を離れ獨修獨學、本年の春富士山の詩十二葉の屏風に書して宮内省に獻じて天覽に供ふ、鐵門奮勵して前後赤壁賦、長安古意、正氣歌、歸去來辭、楠本碑文、飲中八仙歌を十二葉に書し宮内



省に獻じ再び天覽に供ふ、去る九月九日赤坂東宮御所に召され、皇太子殿下謁を賜ひ御前に於て後赤壁賦、公子行を揮毫し大に九重の寵を得其後貴顯諸卿に招待せられ至る所に喝采を得鐵門の名漸く都下に傳はるに至りぬ。

始め我社に鐵門の書を寄せ來る、其字を見るに緩なるは雲煙の如く、急なるは雷電の如く、急下數百言一幅の中に集り、其字其躰つぶさに變幻の妙を具ふるを以て頗る其眞似を疑ふ、去廿日鐵門我社に來り大幅を展べて樓上に筆を揮ふ。鐵門憶する色なく大筆を提げて「龍嘯起雲、虎嘯起風」の二句を書き。又「壽」及「花」の字を満紙一面に大書せり、其字躍々として鋭く又悠々として迫らず、字躰誠に老練、筆力亦雄健、亦一種天受の奇才と稱すべし(早熟の可否は暫く論ぜず)。

鐵門人と爲り溫厚一見の婦女の如し、才智能く長じて五歳の小童に似ず、抑つて將來を慮るに餘あり、若し身體の健康を失はず勉めて大成を期さば、此童造詣する所豫測し難かるべし、鐵門も退きて實力を養はんが爲め去廿二日東京を去りて鄕里土佐に歸りたりといふ。

征戰幻燈

其四　平壤の戰(下)

敵を此方面に牽制するの目的を以て正面より進みたる大島少將の混成旅團は、軍を分て四となし、右翼隊は西島中佐司令官たり、中央隊は武田中佐司令官たり、左翼隊は奥山少佐司令官たり、豫備隊即ち遊擊軍は一戸少佐之を率ゐ、輜重梯隊は島崎大尉之を司令し、右翼隊は十五日午前四時營を發して船橋里といへる所の東に向て進むべく、中央隊は午前三時出立にて船橋里に進むべく、豫備隊之に次ぎ、左翼隊は木瀞橋といへるより大同江を渡りて敵の右翼に出づべく、其方畧定まりぬ。



野津中將

斯くて豫定の期に至り、右翼隊は船橋里の黍畑の間を間行して敵の第一砲壘を攻擊し、中央隊も同じく進ん

で側面より敵の第一壘第二壘を撃てり。此時敵は豫て用意やしたりけん。直ちに激烈なる砲射を始め、二十餘時間寸暇もあらず相共に砲撃をつゞけり。

四時四十分頃激戰の眞最中進軍の喇叭は我が軍中に起れり。右翼隊は一大突貫をなして疾風に敵壘に迫れり。敵の第一壘は遂に我手に落ちぬ。

右翼隊は更に進んで敵の第三壘を奪はんと欲し、中央隊の一部は森少佐之を率ひて側面より第二壘に據りて同じく第三壘を占領せんとす。

第三壘は堅固宏壯守備に便にして攻むるに宜からず。

中央隊に在りたる第十一聯隊第一大隊第一中隊長町田中尉は先づ十四名を率て挺進し、第二壘に至るや身已に三丸に中りて倒れ、猶氣を皷して已まず。已にして下士死し、兵卒死し、殘るもの僅に山下軍曹の外二名の兵のみ。

暫くの間に漸に進みたる二個中隊は中隊長林大尉を失ひ、今井中尉を失ひ、大隊長森少佐も頭部に一發を受け、死傷多く、遂に第三壘占領の目的を達するに至らざりき。

敵は曩に第二壘にありたりしも、我が兵の勇悍を恐れ、自ら第二壘を棄てゝ力を第三壘に併せたりき。此の堅固なる第三壘を奪はんとして我兵死するもの六十七八人、亦以て其如何に烈しき戰なりしかを察するに足るべし。此時已に午前六時半頃なりき。

正面の激戰少しく弛むに至り、朔寧元山方面より進みたる立見旅團長大迫旅團長の兵北の方牡丹臺にて激戰す。而して正面軍の左翼奥山少佐の隊は牡丹臺酣戰の頃大同江を渡りて敵の右翼を撃ちたりしも、清兵羊角島の人家を焼き拂ひて烟焰天に漲り射點も見へずなり、且つ右翼も進みたる摸様なきによりて、暫く攻撃を中止したり。

敵は精鋭を聚めて正面を防ぎ激戰午後二時に至りぬ」。

我兵は或は七八を率ひて挺進して壘に迫るあり。或は抜刀して敵陣に入らんとするありしも、天然の地勢如何ともすべからず。中途にして丸に中りて殪る、もあり。已に敵壘に就て一齊の側射の爲に悉とく倒る、あり。

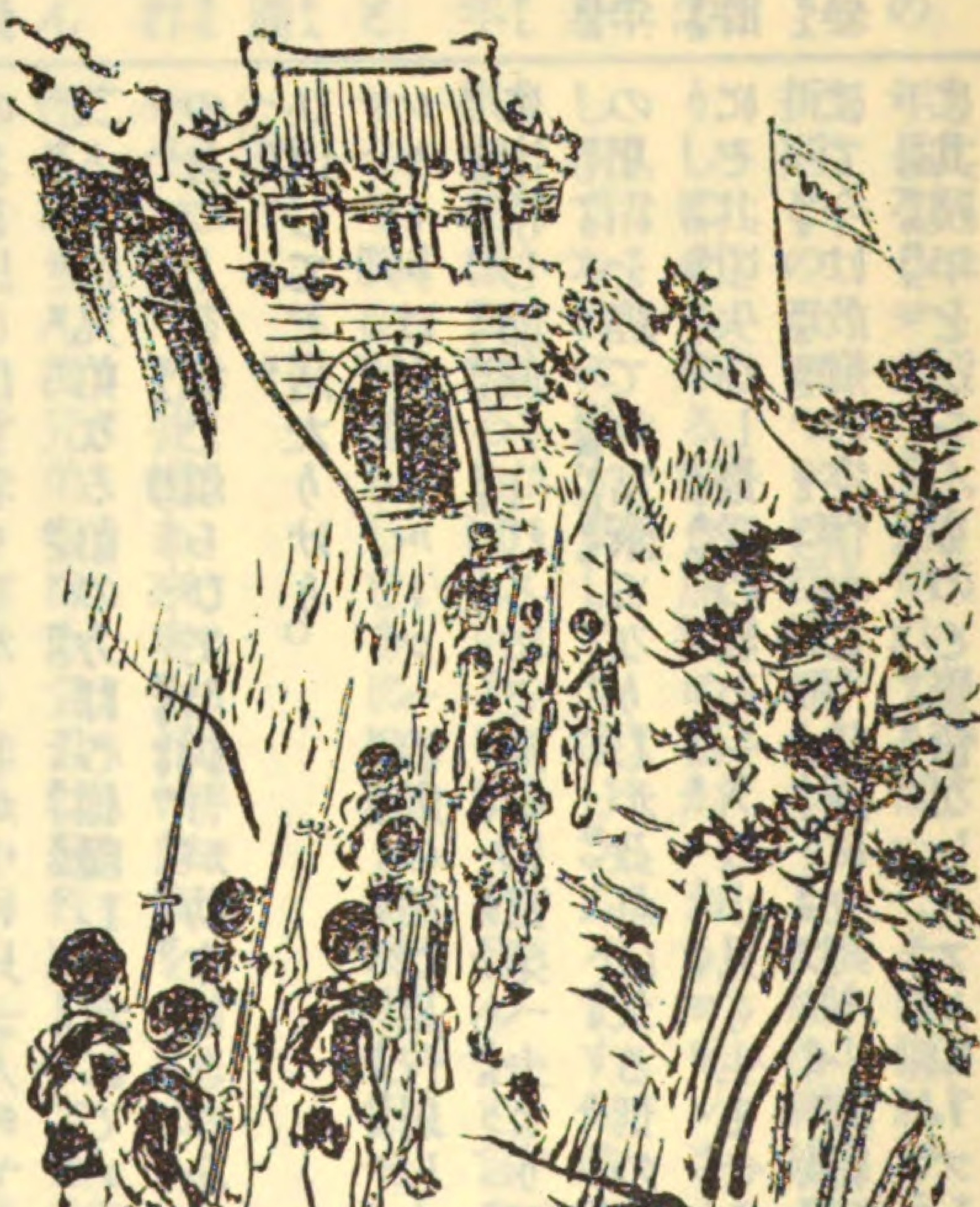
此時師團本隊野津中將の兵は已に敵の左側に寄せたりき。而して豫備隊長一戸少佐は來て船橋里の東南より進撃しぬ。

旅團長大島少將は豫備隊の前頭にありて戰を見つゝありしが、胸部に胸傷を受けたり。

午後三時大雷雨、兩軍相引に引く。

此日立見少將が率ひたる朔寧方面の一隊は騎兵を以て猛進し、清將左寶貴が守れる乙密臺を碎き、平壤第一の天險と稱する牡丹臺を取り、平壤城の一角を陷れたり。平壤は先づ此の手よりして破られぬ。

此時清兵險に據て玄武門を扼守せしが、三村中尉の一手進んで門に就き、一卒原田重吉大膽にも門の左側の坂を攀ぢ入て門を開けり。我兵因て侵入したり。敵兵遂に白旗を壘上に樹てゝ降を請ふに至り、立見少將は自ら危地に入て談判したりしも、此日は未だ纏まるに至らざりき。



玄武門を開く

又野津師團長の本軍は大同江を渡て堂々として平壤の

南西より押寄せ、十五日敵の突騎を鏖にし、日暮れぬ。

十六日朝總進撃に平壌全く我手に落ちぬ。凱歌は天地を撼しけり。

歓待の試験

無一生

佛國モンペリエーにシャール、ボワイエーと呼べる少年ありけるが十七歳の時に兩親に死別れ一人の叔父の許に引取られけるが叔父には二人の息子ありしにぞ新參の甥に對して左まで愛憐を加へざりき。

去れば爲すともなく叔父の家に厄介の身となれるを心苦しきことに思ひければ佛國殖民地グアドループへ赴き度由を叔父に請ひて其許可を得たりしにぞ極僅少許の兩親の遺金を以て旅の準備を整へ遠く故郷を離れてグアドループへ旅立ちしけるが其以來は世間にては絶えて孤子噂を聞く者なく叔父の家にても絶えてシャールのことを思ひ出す者もなかりしが中に只一人シャールの二人の從兄弟なる弟の方は心様優しき者にてシャールの身の上を案じ煩らひて時折吾が幼きときのことども思ひ出してぞ居たりけり。

シャールはグアドループへ渡航の後は品行正しく職業に出精し節儉を守れるにぞ漸次に富榮へ夫より三十年の星霜を經て大富豪となりしが盈れば欠る世の習らひにぞ其頃失ひし最愛の妻に一人の小兒も生ませざりしにて今は故郷の空懐かしく佛國に立歸り一家親類の中に其殘年を送らんものと覺悟なしグアドループを船出して錦を着て歸國の途に就けるが、航海の途中にて難船に出遭ひしが漸く一身を拾ひ得たるのみにて船に積載せたる財産は悉皆海底の藻屑とこそは消失せけりなれどもグアドループには難船にて失へるよりも十層倍

の財産を殘し置きしにぞシャールは左まで難船の不幸を苦にもせず夫れのみならで、シャールは故郷に在る彼の二人の従兄弟に吾が財産を分配し兄弟の如く世を送らんと思ふものから難船を機會に彼等を試めしたる上にて彼等は果して吾が恩恵を施すに足る丈の價値の有無を自身に見極めんものと決心したりけり。

斯くて故郷のモンペリエーに歸り着きてシャールの念頭に浮びしは第一に先づ彼の二人の従兄弟の當時の身分を知るの一段にてありけるがシャールは従兄弟の年長の方は商法を相應に甘く遣つて退け左して富めるとにあらねども今は商法を廢めて吾腕にて贏得たる財産にて安らかに光陰を送れるに引換へて弟の方は不幸打續きて今は餘儀なくも左せる收入もなき某職業に甘んじて辛くも家族を糊らし居れるとを聞知りけり。

却說シャールは従兄弟等を試めし見んものと思ふものから故意と垢は付かねど毛の耗切れて繊維を露はしたる古びたるフロックコートを被り同じ様なるズボンとチヨツキを着け粗大な赤のクラベツトを掛け古びたる粗大なる靴を穿き是れも毛は耗切れたれども丁寧に羅紗刷毛にて拂ひたる帽子を被り斯る服装にて従兄弟の年長なるジヤンを訪問れて一間へとこそは導れけり。

折柄この日ジヤンは機嫌悪しかりしが縦令機嫌が好かりしにせよ斯る穢き服装の男が「オヽジヤンさんか久し振でお目に懸りましてお懐しうムイます何時もゴ無事で此様な悦ろこばしいとはムイません」と言ツてジヤンの腕に取縋りしときには忽まち機嫌を損せしなるへし。

ジヤンはコノ蒼蠅き來客を斥け怒氣を含んで「コレハ怪しからん従兄弟呼はり貴君は發狂ばしいてお在ですか僕には従兄弟は一人もムイません併し若し貴君の様な者が従兄弟にあれば僕は早速お謝絶です」「コレハシタリ何を仰つしやいます貴君はシヤール、ボワイ

エーをゴ存知ないのですかアノ三十年前……」
「何に三十年經過と夫れは左樣かも知れないが僕は左樣な覺えはない併し其シャールが現世に存生で居り而して其シャールが貴君であれば餘計な口數は廢止として貴君何のゴ用です何卒急イで下さい簡略に願ひ升人が待つてるのだから」。
「ジャンさんお話し申すも誠に癪の種ですが今回佛國へ歸國の途中難船に出遭ひまして僕初め乘客一同漸やく一命丈け助かりました樣な次第で其時僕は十萬法を海底に葬りました」。
「成程お話と云ふのは左樣な次第ですか其處で僕に如何して是れと仰つしやるのです假に其金銀が海底に沈んで居るものとして僕が其を海面に戻す勢力があるのですか途方もないヿです」。
「否何に左樣な次第ではムりません併し貴君は親戚なり又朋友なりの情誼として多少僕に助力して下されましやう、僕は貴君が當時結搆なゴ身分でお在と云ふヿを承りゴ同樣に悦こばしいヿで何卒ゴ好意に預り度存じます。
「コレハ〳〵僕をお見込になつて痛み入ります誠に有難い仕合です貴君が失敗をして其を償なはせやうと僕をお見込になり貴君が馬鹿をした其尻拭を僕にさせるなんぞは成程貴君に取ッては大層便利でしやう何樣にかして進げ度にも如何も僕には何樣して進げるとも出來ません貴君は僕のためには緣もゆかりもない赤の他人です若し貴君が僕の親戚だと言ッて親戚呼はりをなされば僕は其謬妄を正さずには置きませんから何卒左樣思ッて下さい眞個に如何も好い親戚だ」。
斯てシャールは室より戶の外に戶の外より表へと無情なるジャンに靜と押出され乍ら閾の上にて下を向き低聲にて「ジャンさん少くとも五法丈貸して下さるヿが

出來れば誠に有難い仕合です今に何時か屹度お返却し申ます否何に五法出來なければ二法でも結構です」。

「誠にお氣の毒ですが僕は持ちません到底出來ませんと言ひッ、少し強くシヤールを押して取りも直さず表の方へ突出し怒氣を帶ひて門の戸を閉めて奥へ行き家族の人々に向ひ今出行きし男が若し再び來らば戸を開けてはならぬ故能く其顔を見覺え置くべしと言聞せけり。

寔にやシヤールは宛然腸を斷たるゝが如く「アヽ何たる邪慳何たる傲慢だらう是が僕に助力をして呉れるのは何の雜作もない身分でありながら僕に對する親戚の仕打だな左すれば彼の貧亡なジヤンの弟は僕に對して何樣な待遇をするかしらんアヽ親戚を試めすとにしたは好い思付きであつた若し彼のエチエンヌが兄のシヤールと同樣であれば明日は早速グアドループへ引還して仕舞ふまでだヨシ〳〵左樣な不人情な人々に一文だつて塵ッ葉一ッだつて遣るものか」。

今度はシヤールはエチエンヌの方へ遣ッて行きしが偖ても待遇振の違へるとよ此處では別段姓名を名乘る迄もなくシヤールの姿の見ゆるや否やエチエンヌはシヤールの領首に身を投掛けて「コレハ〳〵シヤールさんか實にお珍らしい」と言ッて家内の人々を呼びて共々に嬉し悅こび珍客の到來とて夫れは〳〵の厚遇なりけり。

一別已來絶えて久しき再會に相互に積る情緒を敘べたる後シヤールは彼の難船のヿを物語りエチエンヌは餘所事ならず耳を傾け眞實罩めてシヤールの手を握り締けり。

「シテ見ると貴君は僕よりも不仕合なんでしたね併し僕は一人の朋友に多少の助力も出來ぬ程貧亡ではありません夫れは左樣と貴君の活計の立つ樣に僕の樣な一寸した何かの口を探すヿにしましやうが口の見付かる

迄の處當分僕共で食べてお在なさい此方は少し手狹ではあるけれど何ァに搆ふヿはない少し窮屈な思ひをすれば夫れで濟むヿだ而して何處かに貴君の候口を見付けて進げましやうよ」優しきエチエンヌはヤオラ立上りつゝ「時に貴君金子にゴ不自由でしやう失敬ながら少し許りですがコノ金子を貸して進げるから納めて下さい貴君の都合の付イた時返却して下されば宜イのです今少しあると好いが餘り輕少でお氣の毒です」と言ひッゝ簞笥の引出しを探りてエチエンヌのためには唯一個の金貨を取出して卒とばかりシャールの前に差出しけり。當下シャールは兩眼に泪を浮べエチエンヌの手より件の金貨を請取り唇邊へ持添へて接吻し泪に咽びて聲の調子も斷續に「ア、僕は貴君がお心に懸けられたこれなる金貨は一生涯保存して置ます僕は眞實赤貧ではありません何を隱くしましやう僕は大富豪です僕は僕の資産を分けに來ました是れから貴君の子供は矢張僕の子供です貴君の樣な優しい氣立の人を試めしたのは誠に濟まないヿでした何卒許して下さい」。ジャンは始終の樣子を聞知りてア、自分が惡かつたと後悔はせず唯羨ましいヿにて病氣となりしが彼は有らゆる卑劣なる手段を盡してシャールの機嫌を取結び其恩惠に預らんとしたりしが更らに其詮なく己が曲れる心の刑罰を受けゝり。

水師提督ホブソン

（口繪の繪解き）

海洋島の海戰は、天下の青年をして身を海上軍人として立てんとの熱望を發せしめたり。海國の兒は海に行くべし、海の生活亦壯且快ならず乎。

水師提督ホブソンは一千七百二年西班牙ウイゴ港の戰ひの敵の水閘を破りたりし驍將なり。彼年未だ少か

りし時ワイトといへる所の一裁縫匠の許にありしが、或時英國の軍艦此の島より解纜するとの事を聞き、疾走して海岸に至り之を觀しに、其壯勇比なきを見て、勇心禁する能はず。忽ちに大志を發して身水軍の人たらんことを欲し、何の考もあらばこそ直に岸に繋ぎし小舟に跳り乘りて、小腕ながらも滿腔の熱心を以て漸くに軍艦に漕きつけたり。遂に船長の許を得て義兵となりぬ。

後數年、彼は雙肩に功名を荷ふて郷に歸り、其昔賤しの業を執りたりし小舍に來りて樂しく飲み且つ食ひたることありしと云ふ。

時事一斑

『黄海の大捷』

畏き邊に宮仕する人々の專ら謡ふと聞くなる黄海大捷の歌に、

頃は菊月半ば過ぎ　我が帝國の艦隊は
大同江を出艦して　敵の所在を探りつゝ
目ざす所は大孤山　浪を蹴立てゝ行路に
海洋島のほとりにて　彼の北洋の艦隊を
見るより早く開戰し　或は沈め又は燒く
我が砲聲に彼の艦は　跡しら浪と消失せぬ
忠勇義烈の戰ひに　敵の氣勢を打挫き
我日の旗を黄海の　波路に高く輝やかし
功績を成して勇ましく　各艦ともに揚げ競ふ
凱歌は四方に響きけり　凱歌は四方に響きけり

戰爭と醫術の進歩

平壤負傷者の一部去る三日宇品に着し、廣島陸軍豫備病院に入りしが、石黒軍醫總監は同夜直に將校八名及ひ士卒中重傷者の繃帶を解きしに、下の如き事實を見出したりと云ふ。

(一)平壤にて繃帶を施こしたるより九日間其儘にてありたる者にて膿汁は勿論徴臭だもなかりしと。
(二)仁川にて繃帶を替へたるより四日間を經たるもの丶中濃汁及臭氣あるもの稀なると。
(三)繃帶所にて施こしたる治療に不適當の點を見ざると。
(四)百十一名の負傷者中發熱せるものは僅かに四名に過ぎざると。

是れ偏に醫術進歩の効にして、兵士に創傷手當を敎へ置き、戰場に消毒藥さへ携へしむるに由らずんばあらず。去れば肉部を貫通せる銃創の如き明治十年西南の役の時に比すれば日數三分の一位にて全癒すと。

健氣なる婦人

『陸軍一等軍醫木澤恕氏は第三師團附なりしが、今年八月俄に第五師團に附けられ、野戰病院附として韓地へ出征せられしに、九月上旬急性の熱病にて沒せり。然るに九月十六日平壤戰報の達するや石黒軍醫總監は書を在大坂の遺族に寄せて曰く、「余は木澤軍醫の外科に長ずるを知る。故に遠く大坂に抜きて廣島の師團に附け出征せしめしに未だ其技倆を施こすに及ばずして斃る。昨日平壤大戰の報に接し今日木澤をしてあらしめば夜間燈を點して外科の治療を施こす最中ならんと懷舊に堪へず。云々」と。未亡人あい子其書を墓前に供し、「良人總監の知遇を受け、未だ之に報ひずして逝く。妾不敏なりと雖せめては平壤の負傷者を看護してなりと一は良人の志を繼ぎ、一は總監知遇の萬一に報ひ奉らんもの」と。因て直ちに旅裝を整へ廣島に來り、菊地軍醫正によりて總監に此事を申入れられたり。總監は其志を嘉みするも看護婦の事は赤十字社に一任しあれば該社に申し出づ可しとの事にて、乃ち目下出願中なりと』、國民新聞は斯く記せり。

彼も人の子のみ

劍を執れば敵人なり、劍を釋けば彼も人の子のみ。汝の敵を愛せよ。

我兵を獲るや眼を抉り頸を斷り其殘忍を極めたるにも係らず、清兵の我に捕へられしもの、其傷者の如き已に安らかに赤十字社病院の樓上下に眠れるにあらずや。

嚮に米國ニユーヨークウヲールド記者平壌の俘虜を見る、

記者問　余は局外者なり。局外者に向て訴へんとする事ありや。

清士官答　君の厚意を謝す。今君に何の訴ふべき事なし、只大日本の仁義に富める將校及兵士諸君の待遇の優なるに感謝するの外なし。

記者問　在獄中別に不便を感ずるなきや。

清士官答　一の不便なし。只結飯の少しく小塊團なると衣服の寒天に向て薄きには少しく困却せり。

長岡少佐之に應じて曰く。當地方我將校始一同衣食住には不便せり。獨り汝等に止まらず。兩三日を出ずして我國に送る可し。我國に達する上は衣食住共に汝等に滿足を與ふるの時あるべし。

記者問　日本帝國の如此親切丁寧に君等を待せらる之に對して如何か感ある。

清士官答　誠に意外の事なり。之を我國に又諸外國に其例を聞かず。益日本の仁義に富めるを確信す。誠に感謝に不堪。

清士官語を續けて傍人に請て曰く。銀幾何兩を出さば我等の中一人を放還するや、願くは憐憫を垂れ我等の中一人を放還せられよ。歸りて我舊里の父母妻子郷黨に告ぐるを得ば彼等の大日本に向て感激すること必せり。之を我國を始めとし諸外國に見るに如此俘虜を優遇せらるゝの例を見聞せず。故に我等の父母妻子の我等が俘虜となりしを聞くと同時に非道の最後を遂げたるを知るならん、其悲むや必せり。願くは我公明なる將校閣下に向て一人を放還し我等

が父母妻子の悲を轉じて喜となさしめられん事を。少佐曰ふ戰爭終結の後無事に歸國するの喜ある可し。只だ其時を待つの外なし。一埸肅然涙を催すものあり。此の如きは日本人の義氣のみ。

實業教育

實業敎育の手始として實業敎師となるべく本年東京工業學校に集りたる人員は、下の如き分ちを以て各學科に就きたり。

學科	本科 地方長官薦擧	本科 試驗擧	速成科 地方長官薦擧	計
金工科	六	三	一三	二二
木工科	六	三	一三	二二
染織工科	三	一	染色二 機織二	八
窯業科	三	一	陶器五	九
應用化學科	三	一	〇	四
合計	二一	九	三五	六五

唯見る金工科木工科は則ち最初の實業敎育に最も重きを置かれしものなることを。

大坂兒童の眼

或人の調査に成れる大坂市内各小學校生徒の視力は實に下の如しと云ふ。

眼種	男	女	合計
正視眼	七九二人	六七六人	一四六八人
近視眼	二〇八	一三二	三四〇
遠視眼	三六	二八	六四
斜視眼	三	二	五
亂視眼	三	〇	三
トラホーム	二一六	二〇四	四二〇
角膜的にて視力不充分	一二	四	一六
眼瞼炎	三	六	九
總計	一〇五六	八四〇	一八九六

其原因は遺傳及び躰質に基くもの多しと雖、其病原は全く學校内の生活と又家庭内の生活の摸様一變するよ

り生ずるものにして、之が誘引の重なるものを擧ぐればば左の諸點なりとの事なり。

(第一)物躰に近接して物を視る事　例令は學校の机及腰掛の高低生徒の身の丈に相叶はざる類。

(第二)光量の不足　校舎の構造及各自家屋建築の不適當。即ち低くして突出したる擔或は校舍及家屋に近接したる高き墻塀又は紙を張りたる障子等の類。

(第三)活潑なる運動不足及空氣流通の不充分　活潑なる運動不足或は空氣流通惡きときは、之が爲に身躰筋肉の發達を防け、或は之を弱くす。然る時は眼も又内壓に抗する能はずして眼球遂に後部に伸展す。之れ近視眼の直接誘因となる者なり。

亦大に學校衞生上の注意を要すべき事にあらずや。

朝鮮國民の新教育案

岡倉由三郎氏が東邦協會の爲に立案したる朝鮮國民の新教育案の大要に、

今日の急務として開くべき三學校は、曰く中學校。曰く實業專修學校。曰く小學校。

○中學校は我邦の高等小學と中學との間に位すべき簡易なる官立中學校にして、最も速成を旨とす。其目的は、(一)卒業の上は直に各小學校の教師たらしむること。(二)卒業の上は直に各省官吏に登用すること。(三)卒業の上は直に實業專修學校に入學せしむること。

其中學校學課は當分

一、外國語(日本語)。

二、修身大意(孔教を基本として立志談等をなす)。

三、地理大要並地文(内外)。

四、歷史大要(内外)。

五、理化一斑。

六、數學(平洋算凡そ比例まで)。

七、經濟大意。

其待遇は官費生とす。

其學期は二年若くは三年とす。

○實業專修學校は實用を旨として(一)農科、(二)醫科、(三)文科、(四)工科、(五)法科、(六)理科など敎ゆ。

其學期は二年若くは三年。

其待遇は官費生とす。

卒業者中より選拔して留學生を海外に出す。

○小學校は普通學の初步を敎ゆ。

其學科は、(一)國語、(二)漢文、(三)修身、(四)地理、(內外)、(五)歷史、(六)、算術(四則)。

其學期は初等五年、女子をも入學せしめ(得べくんば)、高等二年男子のみ入學せしむ(男女別室)。



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行
明治廿五年九月十四日遞信省認可